

平成 26 年度建築研究所すまいづくり表彰

受賞作品・活動

受賞作品ごとに、応募内容と合わせて、

「受賞名」、「部門」

「作品名」、「応募者」、「所在地」、「寸評」

を記している。

なお、「寸評」は審査報告にて示したものの再掲である。

地域住宅賞

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅賞

住宅部門

十津川村復興公営住宅

十津川村長 更谷 慈禧

奈良県十津川村

当地域は奈良県最南端に位置する山地にある。2011年9月3日、台風12号による豪雨の被災者のための地域型復興住宅建設に当たって、十津川大工等の参加協力を得て民家調査を行い、従来から守られた山地住宅の原則25項目を発掘した。この結果を適用した作品（災害公営住宅）である。傾斜地を利用し、最小限の土地造成により住宅群を配置し、従来の山村風景に溶け込むように建設した。地元木材の利用、多雨地域に対応する建築的操作等と同時に環境性能も確保され、落ち着いた住宅建築を実現している。地域環境特性を把握し既存集落に溶け込んだ住宅開発の好例である。

十津川村復興公営住宅

【応募者名】 十津川村長 更谷慈禧 勤務先名 : 十津川村役場 勤務先住所 : 奈良県吉野郡十津川村大字小原225-1
 連絡先(勤務先) TEL : 0746-62-0001 (代表) FAX : 0746-62-0580

● 作品の概要

日本一大きな村である十津川村。奈良県最南端で急峻な山々に囲まれた秘境の村は、2011年9月の「紀伊半島大水害(2011年9月台風12号豪雨災害)」からの復興に取り組んできた。被災前から林業を核とした村づくりを目指していた十津川村は、復興公営住宅・被災者の自立再建住宅のモデルとなり、林業振興に貢献するための「十津川村復興モデル住宅」を建設した。

復興モデル住宅には、十津川の気候風土や景観、生活様式への配慮だけでなく、十津川杉の魅力を最大限引出し、省エネ、高性能、低コストであることが求められた。

設計者チームは、設計に先立って十津川の住まいるの所作を理解するために、民家調査、十津川大工とのワークショップ、住民ヒアリングを繰り返した。年間降水量が約2,300mmときわめて多く、急斜面に沿って建てられる十津川の民家は独特の建築様式がある。また神道の家が多く、神棚や先祖の位牌を置く場所が重要視されるなど、多くの知見が得られた。

十数人の十津川大工と民家調査の写真を基に議論を重ね、例えば「山間地独特の風と雨から妻壁を保護し、かつ重要な景観要素であるスバルノフキオロシを継承

する。」などのように、住まいるの所作を25項目に整理、共有した。また、省エネなど現代の住まいるりに必要な新しい手法もこれに加えた。

これらの住まいるの原則に従って2棟の復興モデル住宅(平屋建てタイプ、二階建てタイプ)を建設した。その後、2014年4月までに、集落再生を見据えた「復興公営住宅13棟」と「医師住宅1棟」が完成した。

● 地域性への配慮事項

平地の少ない十津川(森林率約96%)では、大規模な造成を行わず、集落に住宅を埋め込むことがふさわしい。村の安全・安心拠点である谷瀬・高森集落に集約された復興公営住宅は、既存の地形や樹木、生活動線である「里道」の継承を優先して、間口5間×奥行3間の細長い戸建て住宅を、等高線に沿って配置した。高低差の大きい敷地では、谷側を高基礎として高低差を建築的に解決する、この地方に多い建築様式「吉野建て」を採用した。

建物は雨掛かりを軽減するため軒を低く、深くする一方、室内に圧迫感がないよう屋根断熱・勾配天井とした。十津川民家の特徴である杉縦板張りとしスバルノフキオロシを設け、擁壁には石積みを施し、風よけの板塀や生

垣を廻すなど十津川らしい風景を継承した。

十津川の人工林の材積は杉:桧=7:3であり、今後は杉の活用が期待されている。10齢級程度(約50年生)の杉(胸高直径280mm)が豊富にあるため、間伐材からとれる最大寸法4寸×7寸を主要な梁とし、柱を4寸角とする構造計画とした。十津川杉の魅力を活かすため、内部は柱・梁を見せる真壁造りとし、大黒柱・差鴨居など民家のかつ骨太に材を用いた。

● 作品の特徴

十津川村では、関係各課を横断した「活力と魅力あふれる村づくり推進委員会」を立ち上げ、村づくりの戦略を検討しながら復興事業を推進した。今後の十津川村の安心・安全拠点となることを目指し、復興事業を推進した谷瀬集落と高森集落では、現在「村の芯づくり事業」が継承されている。若者から高齢者まで働きたい、住みたいと思える集落を創ることを目的に、空き家利用や新たな福祉施設の構想、林業の六次産業化に由来する産業的なプロジェクトを含め、復興の次の段階の村づくりが進んでいる。



集落に溶けこんだ復興公営住宅(谷瀬集落)



杉縦板張り、スバルノフキオロシ等の景観要素の継承(谷瀬集落)



十津川村の魅力を活かす真壁造り(谷瀬集落)



十津川村全図



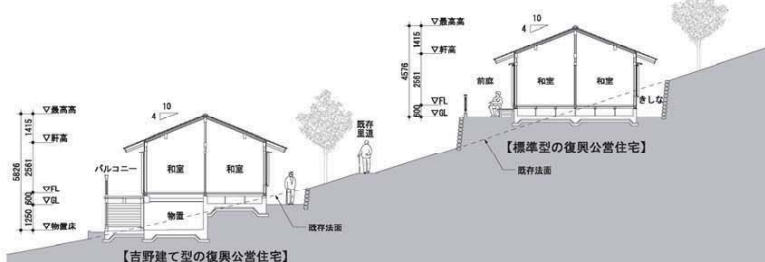
谷瀬団地配置図



高森団地配置図



斜面地形に最小限の造成で配置した復興公営住宅(高森C団地)



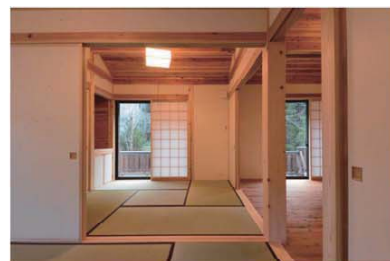
斜面地を活かした復興公営住宅



斜面地を活かした復興公営住宅(高森集落)



石積み、板塀、生垣による十津川らしい風景(高森集落)



大黒柱、差鴨居など、十津川村を骨太に用いる(高森集落)

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅賞

地域部門

Share 金沢

株式会社 五井建築設計研究所 代表取締役 西川英治

石川県金沢市

障害者、高齢者と健常者、若者が一緒に住み生活する 25 棟のまちづくりの実践である。この建設地は金沢の郊外住宅団地に隣接する旧病院跡地を利用し、中央に学生向け宿舎とサービス付き高齢者向け住宅等を配置し、周辺地区には、温泉、レストラン高齢者デイサービス施設、商業施設の町並み、児童館や同支援センターや多様な日常生活施設などが取り囲んでいる。周囲には濃い緑地があり良好な環境が整えられている。周辺の住宅団地の住民も多く訪れ、丁寧な住民活動と相俟って今後期待される持続可能な地域社会の具体像が示されている。

Share金沢

〔応募者名〕 勤務先名：株式会社 五井建築設計研究所 代表取締役 西川英治 勤務先住所：石川県金沢市間屋町2丁目1番地
 連絡先（勤務先） TEL：076-237-8441 FAX：076-238-9094

●作品の概要

「Share金沢」は従来の「縦型福祉」から脱して、障害者だけではなく、健常者や若者、高齢者も分け隔てなく一緒に暮らせる街を創るという試みである。



街全体が就労支援施設

福祉施設、障害者施設、健常者の施設など計25棟の建物で一つの街を形成している。街全体が就労支援施設と位置付けられており、障害者を含め、学生から高齢者が生活を共に出来る街である。

自然環境を活かしたヒューマンスケールの街

敷地全体を使って、平屋もしくは2階建ての建物を主体とし、自然環境を活かしたヒューマンスケールの街を創ることを目指した。そのため、小さな部分のイメージを積み重ねて全体を構成するという手法を取っている。求められた福祉施設や住居、店舗等の建物も機能別配置とせず、建物の規模や形態に応じ、敷地全体にランダムに分棟配置している。

「アクティブ・エイジング」に基づく「ごちゃ混ぜ」の街

この街づくりのコンセプトは「ごちゃ混ぜ」の街と分かりやすく表現できる。「ごちゃ混ぜ」の意味はあらゆる人が分け隔てなく、ふれ合う環境が備えられているということであり、運営法人はそうした街を「アクティブ・エイジング」という考え方【住民の健康や安全が守られ、積極的に社会的・経済的・文化的・精神的活動に住民自身が参加していける仕組み】に基づいて街の住民自身が創りあげていく「私がつくる街」という言葉を運営コンセプトとして打ち出している。その象徴的な施設が「若松共同売店」と名付けられたショップである。ここはサービス付き高齢者向け住宅の住民を中心に、仕入れから販売までの運営を行っている。



●作品の特徴

敷地は旧国立病院が立地していた金沢市南東部の郊外にあり、廃院になってかなりの年月が流れて荒れ放題の状況であった。しかしながら敷地周囲の雑木林をはじめ、敷地内に残された樹木はこの地域一帯の良好な自然環境を創りあげていた。この既存の良好な緑を可能な限り残すことは計画

上の大きなポイントであり、また、敷地の南側と東側が5m程度高台となっているという敷地特性を生かした計画が求められた。計画要旨は次の3点に要約される。

- ①大規模で象徴的な施設づくりではなく、敷地全体を使って、極めてヒューマンなスケールを持つ街を創る。
- ②求められる機能は機能別配置によらず、建物の規模や形態に応じて、敷地全体に適切に分棟配置する。
- ③既存の緑と新しい緑が調和した自然豊かな環境を創り、人が触れあい、コミュニケーションが生まれる場の設定を重視する。



●地域性の配慮事項

東北では震災により地域コミュニティが一挙に崩壊された。そのコミュニティの復興にこそ新しい日本のあるべき姿が提示されうると考えている。Share金沢は被災地と立場こそ異なるが、「地域コミュニティの再構築」という同じ目標を持っている。しかも同じ人間として障害者も健常者もない全てを包括した、より広い「地域コミュニティ」である。この試みは始まったばかりであり、その成果はそう簡単に目にする事は出来ないかもしれないが、今後も設計者として深く関わっていきたいと考えている。



地域住宅奨励賞

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

SHIRASU

ARAY Architecture 鈴木亜生

鹿児島県鹿児島市

高温多湿な鹿児島市に建つ住宅である。当地方はシラス大地にあり、豊富なその鉱物資源を利用開発したシラスブロックで創られた建築である。いわば地域の大地が生んだ循環型住宅と言える。

SHIRASU

シラスの人造自然石による環境調和を生む組積の家

〔応募者名〕 勤務先名：ARAY Architecture

勤務先住所：東京都港区麻布台 1-1-19 麻布センチュリーマンション 202

連絡先（勤務先） TEL：03-6234-9881 FAX：03-6234-9882

●地域性への配慮事項

鹿児島は、桜島を中心とした始良カルデラの様々な自然の恩恵を受けている地域である。シラスはその中でも代表的な地域資源である。そのため建築もその恩恵に授かり、シラスを生かして、素材にすることが環境に順応できると考えた。その土地の土を使った建築は環境調和の器となると共に、周辺の街並みにも調和していく。

●作品の概要

住人は高温多湿な南九州の気候の中でもエネルギーに頼らず、環境とつながりをもつエコロジーな暮らしを望んでいた。その土地の風を感じ、雨水を貯め、土いじりを楽しむ。そんな土着な生活だ。敷地は鹿児島市中心市街地から程近いシラス台地の上に広がる住宅地。そこでこの台地を形成する土、シラスを基にして造られたブロックによるシラスの洞窟のような家が生まれた。

台地に蓄積された地質やその地形は、この土地の自然や気候風土をつくりだす要因となっている。自ら空調設備の設置を止めた住人は、ブロック壁全体に温熱環境のコントロールを任せ、身近な自然との生活を抛り処と

し、台地との結びつきを楽しんでいる。

●作品の特徴

施主よりエコハウスの要望を受け、メインコンセプトに「鹿児島だけのエコハウス」を掲げた。敷地はもちろん、鹿児島一帯の始良カルデラの地形をなすシラス台地は、この鹿児島市の自然や気候風土をつくりだす要因となっている。舗装用ブロックを製造する地元業者に開発協力を依頼し、環境負荷を低減するシラスの特性を生かして、国内初めての試みとなるシラスの建築用ブロックを製造した。

この舗装用シラス平板ブロックの加圧成型技術とは、ゼロスランプ加圧成形法といい、従来のセメントと水で混ぜる製法とは全く異なり、シラスとセメントを混ぜ、圧縮することでシラス自体に含まれる水分でシラスとセメントを密着硬化させるものである。自然素材のシラスは再資源化が容易なため、シラスブロックはクラッシュして再加工が可能となり、再生品化することができるゼロエミッションである。また、この舗装用シラス平板は、鹿児島市電の軌道敷に敷かれている。従来のアスファルト舗装を取り除いた後、保水性と排水性に優れたシラス基

盤材の上に高麗芝が敷かれ、土壌なしでも多孔質なシラス基盤材に根を張ることが可能となっている。

そして、この舗装用シラス平板ブロックの加圧成型技術を生かし、初めてシラスの建築用ブロックの製造を試みた。シラスは耐火性・断熱性・調湿性・軽量など多くの特性をもっている。外壁ブロックは、シラスの配合を調整して材料強度を確保し、内壁ブロックは、吸放湿性を高めるためシラス原石をそのまま象嵌した。

これを外周全体に中空層二重壁として積み上げたことで、内部への熱負荷が大きく軽減されている。さらに内壁ブロックは仕上げのまま、室内の湿度を調整している。よって夏はひんやり涼しく冬は暖かく、年間を通して安定した温熱環境となっている。台地に蓄積された地下資源のエネルギー性能をブロックへ再生することで、環境循環型の新しい空間を提案した。同時にこのシラスの性質は、内壁ではシラスの地層の表情として表れ、外壁では風雨や桜島の降灰を吸着しながら、建物が台地のようにエイジングされていく。



土地の土を使い、階段状に積み上げられた外観は、台地と一体化して見える。



リセリング吹抜け



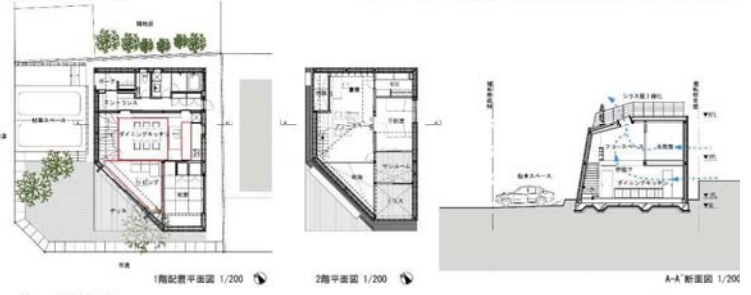
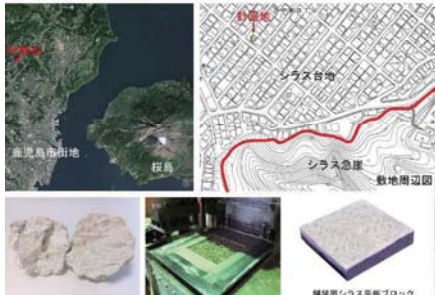
2階フリースペース

バスルーム

ブロックが湿気・カビの発生を抑制してくれる。

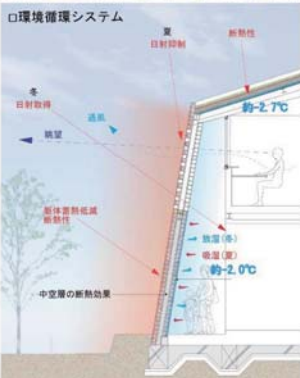
テラス

造り出し積みは心地よい風と美しい光を導く。



外壁ブロック 内壁ブロック 屋上シラス緑化基盤

- シラス粒子を高密度に配合
高強度・断熱性・耐火性
- シラスの原石を象嵌
/吸放湿・吸音性・蓄熱性
- シラスの5つの特性
1. 躯体蓄熱の抑制効果
 2. 高い吸放湿性能
 3. 容易な施工性
 4. 高い断熱効果
 5. 軽量な素材
- 新しいゼロスランプ加圧成形法
従来のセメントと水で混ぜる製法とは全く異なり、シラスとセメントを混ぜ、圧縮することでシラス自体に含まれる水分でシラスとセメントを密着硬化させる。水無添加・半乾式・緻密化・高強度・耐久性・ゼロ炭
- ゼロエミッション
シラスは自然素材なので再資源化が容易。シラスブロックはクラッシュして再加工が可能となり、再生品化することができる。



- ロブロック製造工程
- ① 産地にてシラス原石の採取
 - ② シラス原石をバレットに詰めブロックに象嵌
 - ③ シラスブロック打込み
 - ④ シラス平板ブロックをブロックへ切断加工
 - ⑤ ブロックをさらにタイルへ切断加工
 - ⑥ ブロックに通気のための孔開け加工
 - ⑦ ブロック約5000個 搬送中
 - ⑧ 内壁ブロック積み

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

140 年の歴史をつなぐ庄司家の断熱気密補強

安井妙子あとりえ 主宰 安井妙子
庄司栄治郎

宮城県仙台市

大規模既存民家の改修である。立地する仙台市は省エネ基準 4 地域であり、相応の各部位断熱対応が施されている。結果として、居住環境の向上を伴いつつ、伝統的街並みの保存を試みた取り組みとして評価される。

しょうじけ 140年の歴史をつなぐ庄司家の断熱気密補強

【応募者名】勤務先名：安井妙子あとりえ

勤務先住所：仙台市泉区将監十一丁目4-15

連絡先（勤務先） TEL：022-778-4618 FAX：022-778-4618

●地域性への配慮事項

仙台市宮城野区原町の原町本通りは仙台駅から約2.5キロメートル北東の位置に東西に走る長さ1.5キロメートルの仙台から塩釜に至る街道である。昭和20年の仙台空襲で焼け残ったことにより伝統的な建造物が多く残る。しかしながら旧市街地に近いことから一帯は近隣商業地域、準防火地域に指定されており、大規模なマンションがそびえ建っている。

町割りには間口が狭く奥行きが深い敷地が並ぶ。したがって建物外壁の大半が延焼の恐れのある部分となり、伝統的町家の外観を保つことが難しく、モルタル塗り外壁の家が目につく。しかし歴史に残るような大火に悩まされ続けた人々は、江戸時代から隣地に接する外壁には開口部を設けない、大壁の土塗り壁漆喰仕上げにするなど、防火の工夫をしている。

庄司家は幸いに間口が10間(約18m)と広く延焼の恐れのない外周部分が多いことから、伝統的外観に戻す修復をおこなう、西側隣地に接する外壁の開口部を閉じるなどの町並みに貢献する修景をした。

加えて、他の伝統的建造物の修復見本となり、古い家を所有する人々が1棟でも多く後世に残そうと考えるきっかけになるよう、外構や庭園も含めて美しいたたずまいを実現するよう努めた。

●作品の概要

敷地は原町本通りの南側にあり、南端は国道45号

線に面する広大なもので敷地内には文庫蔵、質蔵等の土蔵4棟、井戸小屋、廁等が現存する。

庄司家は西側隣地に所在する庄司本家から文化三年(1806)に初代惣七が分家した。二代目惣七の六男である林七は土井家の婿養子となり、その長男は詩人、英文学者土井晩翠(土井林吉 1871-1952)である。

現建物は慶応二年(1866)の大火で焼失した後、隣地の本家とともに、明治七年(1874)に建築したと伝わる。居住部と座敷部がL型に建つ。現在の居住部は昭和38年(1963)に、台所部を改築して2階建てとした。

改修前は211㎡であったものを昭和改築の一部を取り壊し、改修後は延床面積約165㎡となる。東日本大震災で、土壁に亀裂が入る等の被害を受けた。

竣工は2014年12月24日である。

●作品の特徴

1. 断熱気密補強 所在地仙台市は平成25年省エネ基準で4地域に属する。断熱材はネオマフォームを屋根に100mm外壁に60mm、基礎内部立ち上がりとペリメーターにスタイロフォーム50mm、基礎立ち上がり外部の一部にスタイロフォーム30mmを施工した。開口部はプラスチックサッシでトリプル低放射ガラスアルゴンガス封入とした。一部延焼の恐れのある部分はペア低放射ガラスアルゴンガス封入を採用した。

2. 耐震補強 不同沈下は最大4cmほどあり調整修復した。腐朽した柱脚6本は古材を転用して根継ぎ

をした。外壁のすべてに構造用合板を張って耐震壁とし、内部耐震壁は、座敷の伝統的空間を守るため納戸等に新設した。屋根は瓦葺きであったものを鉄板葺きに変更したことにより外観は変わるが、耐震性能を増しての安全確保を選択した。

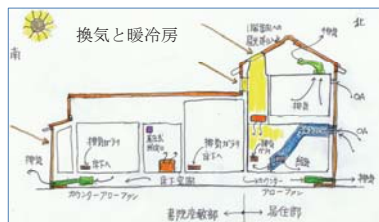
3. バリアフリー 車椅子で移動する家族が家じゅうを移動できるように床高の統一を図り、玄関の土間とホールの段差をなくすために、前面歩道から傾斜約5%のスロープを作った。トイレは理学療法士の指導のもと、手すりなどの位置を決めた。しかし最もしあわせなのは屋内温度のバリアフリーである。

4. 暖冷房換気 165㎡の空間に2.8kwのエアコンを2台配置し、暖冷房に供する。2階に暖房設備はない。常時換気第3種でトイレ、浴室のダクトファンと床下に配したカウンターアローファン2台で賄う。このため床下の温度は1月末の時点で15℃に保たれていた。台所換気は給気連動型換気扇とした。給気は差圧式給気口2か所とチャンパーを介した給気口から3か所に分け、計5か所から供給している。

5. 既存材や自然材の活用 昭和再建部は自己所有の山の本で建築しており豊富に木材を使用している。既存の縁甲板は再利用し、新規床や外壁には金山杉を採用、施主の希望に従って、土蔵に保管してある古材を腰板や付け庇に使用した。建具も修理してトイレ、寝室などに転用している。



民家風の茶の間



換気と暖冷房



断面詳細図

下座敷部 右 居住部



原町本通り

1階平面図

2階平面図



原町本通り

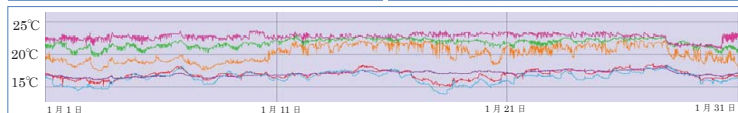
R45 庄司本家の位置 google



座敷の床・棚・書院



新旧の外観 2階廊下から日光を採り込んだ居間・台所 奥は洗面所と浴室



2015年1月1日から31日までの屋内温度記録 測定:東北大学吉野博教授

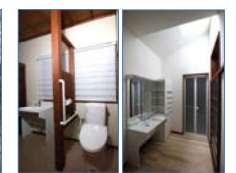
△は床上10cm、○は床上110cm。測定位置は平面図に示す。寝室は暖房なしで扉開放。エアコン2台は常時運転で温度は22℃とお母さまのために高めに設定。仙台市の1月の最高気温は11.8℃、最低気温は-3.4℃、月平均気温は2.6℃、日照時間は152時間。(気象庁HP)



新旧の外観



庭園からみる座敷部



バリアフリーのトイレ、洗面、玄関3点



原町本通りからみる居住部



庭園からみる座敷部



バリアフリーのトイレ、洗面、玄関3点

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

豊富町サロベツ住宅

株式会社まちづくり計画設計
有限会社アーキシップアソシエイツ
豊富町

北海道豊富町

北方地域に立地する住宅建設指針を設定し、地元資源の活用、高气密高断熱の採用、地下空間確保など寒冷地の住み手にふさわしい提案とその実践活動で、地域の住宅関連産業との連携を通し、技術啓発に取り組んでいる。

豊富町サロベツ住宅

〔応募者名〕 勤務先名：株式会社まちづくり計画設計
連絡先（勤務先） TEL：011-223-6607 FAX：011-223-6488

勤務先住所：札幌市中央区南1条西5丁目17-2プレジデント松井ビル100 9F

●地域性への配慮事項

豊富町は、酪農を基幹産業とし、天然ガス、石炭、温泉などの資源にも恵まれていたことから、昭和25年には人口1万人と活気ある市街地を形成していた北海道北部の地方都市である（現在は約4,200人）。平成12年3月に「豊富町住宅マスタープラン」を策定、重点施策の1つに豊富独自の住宅資源の活用を掲げ、翌年に「豊富町サロベツ住宅づくりガイドプラン」を策定した。サロベツ住宅とは、将来にわたり豊富町の社会資産としてふさわしい住宅ストックになるように、住宅の基本的性能を北海道が推進する北方型住宅をベースにして、多孔質で知られる豊富産の珪藻土（珪藻土）などの自然素材を積極的に活用し、地域ならではの暮らし、住まい方を提案した住宅である。当プランにおいては、住民と行政がともに目指す地域の住宅像として、5つの目標と12の基本方針（図1）を掲げている。地場産材である珪藻土を活用するとともに、積雪寒冷の気候条件に対応した断熱性能、省エネ性能を持つこと、十分な堆雪空間の確保等の雪・風対策、地域の文化であるオカムロ（地下空間を活用した伝統的な貯蔵庫）の活用等を重視している（図2）。平成23年2月には住宅マスタープランを発展、見直した「豊富町住生活基本計画」を策定し、さらなるサロベツ住宅の普及に取り組んでいる。

●作品の概要

サロベツ住宅は、「とよとみ」に住まう住民にとつ

て、地域で育んでいく住宅であることを前提としており、今後も改良を重ね、より良い住宅・住宅地づくりを進めていくことが必要であるとの考えから、「民間住宅への支援及び啓発」、「公営住宅における先導的業務」、「地域の人材育成」を総合的に進めている。

●作品の特徴

（1）民間住宅における取り組み

a. サロベツ住宅モデル住宅：平成13年にモデル住宅団地（モデル住宅2棟及び分譲宅地）をコーポラティブ方式により整備した。モデル住宅は12の基本方針を実現している（図3、4）。

b. サロベツ住宅建設支援事業制度：豊富町ではサロベツ住宅建設促進対策として、町内に住宅を建設する場合、建設費の一部を補助する制度を設けている。サロベツ住宅建設基準（北方型住宅建設基準に合致、珪藻土の活用、敷地面積330㎡以上の3つを必須基準とし、その他推進要件の中から1項目以上を選択）に合致する場合は300万円を補助している。これまでに29件の整備が実現している（図5）。

（2）公営住宅における取り組み

a. 民間活力を活かした借上方式（富士見駅西）：公営住宅富士見駅西地区は平成22年に整備された木造平屋建て7棟32戸の団地である。当団地はサロベツ住宅基準に配慮することを前提に借上方式により整備したものである（図6）。

b. 既存住宅の全面的改善（富士見A地区）：公営住

宅富士見A地区においては、簡易耐火構造平屋建て住宅を全面的改善事業により高齢者向けにリノベーションを実施した。改善の場合でも可能な限りサロベツ住宅基準を取り入れた（図7）。

c. 風向きに配慮した住棟配置（はまなす団地）：公営住宅はまなす団地（特定公共賃貸住宅含む）は平成8～14年度に整備された耐火構造2階建て10棟64戸の団地である。当団地は豊富市街地の北部に位置し、特に冬場の北西の風が強い位置にあることから、既存の調査研究を参考として、主要動線での雪の吹き溜まりを低減する配置の工夫を行った（図8）。

（3）地域の人材育成

a. 地元事業者の勉強会の開催：サロベツ住宅づくり研究会（通称：サロ住）は、豊富町内の建築関連産業に関わる17事業所、23名の参加により平成17年1月に発足し、会員の積極的な参加と技術・知識の向上を図るために「設計」「メディア」「運営」の3つの部門を設けて、住宅に関する情報提供や事業活動を展開している。これまで町との連携により12回の勉強会やセミナーを開催し、サロベツ住宅に関する技術の啓発普及に貢献している（図9）。

b. 地元企業の出資による借上公住整備運営会社の設立：サロ住は、その後、参加事業者の出資によりLLPを立ち上げ、借上公営住宅（富士見団地駅西地区）の整備を行い、将来的には管理運営を担っていく考えである。

図1 サロベツ住宅の12の基本方針

家族の成長への対応 ・可変間仕切りと可動収納を使って、間仕切りを自由に。 ・敷地規模はゆとり330㎡以上、庭づくり、来客用駐車場など多目的に利用可能	加齢による身体状況の変化への対応 ・段差の解消はもちろん、ドアノブの形にも配慮。介護期には「介護される側」「介護する側」双方のプライバシーを確保
湿度コントロール性の高い豊富産「珪藻土」の活用 	外貼断熱工法の導入 
「パッシブ換気」システムの導入と床下暖房 	珪藻土を外装に使うなど、「地域色」を演出 
生活の知恵「オカムロ」の活用 	シンプルな落雪屋根 落水（屋根材のアプローチ空間）により雪の滑落を抑制する 
十分な堆雪空間の確保 	開放的な内部空間の演出 
「つくり手」「住まい手」「行政」による協働体制の構築 ・サロベツ住宅づくり研究会など、推進体制の構築	建築協定・まちづくり協定などの検討 ・建築協定・街づくり協定などの自主的ルール締結

図2 サロベツ住宅のイメージ

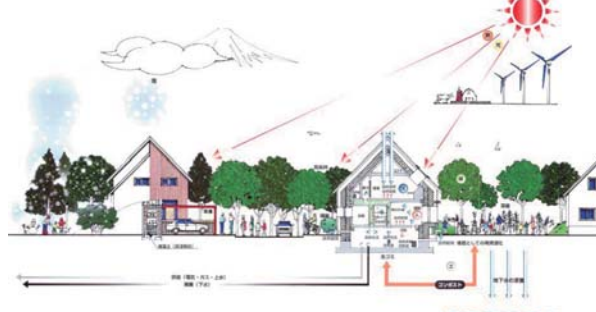


図3 サロベツ住宅モデル住宅



図4 モデル住宅地の考え方

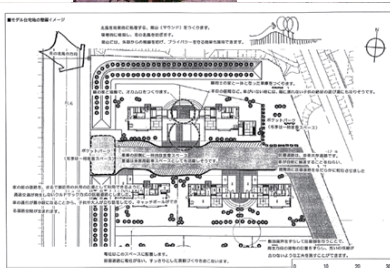


図5 サロベツ住宅の例



図6 借上公営住宅



図7 トータルモデル

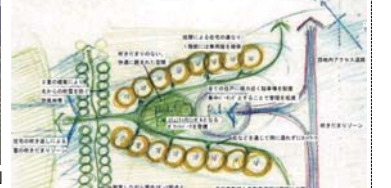


図8 風向きに配慮した配置検討



図9 勉強会の様子

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

カミノハウス ～記憶を残し小さく豊かに暮らす～

辻充孝

辻麻衣

岐阜県関市

関市郊外にある空き家の小住宅改造である。改造を住宅の基本性能を向上する改造と住み手に手の届く改装に2段階に分けて整理し、実施している。外壁改造の室内環境向上と住み手の生活様式の工夫で、温熱通風環境が確保されている。

カミノハウス ～記憶を残し小さく豊かに暮らす～

[辻 充孝・辻 麻衣] 勤務先名：岐阜県立森林文化アカデミー 勤務先住所：岐阜県美濃市曾代 88
 連絡先（勤務先） TEL：0575-35-3889 FAX：0575-35-3890

●地域性への配慮事項

岐阜県関市神野地区。100年前から、ほとんど変わらない田園風景を残す地域に建つ約20坪の古い小さな空き家。この130年余りの歴史を刻んだ小さな家を購入し、佇まいをそのままに各種性能と暮らし向上改修を行った。このような自然豊かな土地でも、新たに住宅が建設され、それに合わせるかのように持ち主のなくなった空き家が増えている。空き家増加に伴い治安の悪化や、自治体の健全な運営が立ち行かなくなることが懸念される。

今回、改修履歴をひも解き、規模はそのままに地域素材や自然素材を用いて必要最小限の改修を行った。小さく暮らすことで敷地にゆとりが生まれ、豊かな自然環境との関係が得られ、暮らしの豊かさにつながる。

また、同市には3つの温泉といくつかの銭湯が残り、現在も地域住民の憩いの場となっている。今回の改修では、浴室は取り除き簡易シャワーのみとし、週の半分は地域資源である外湯の活用を考えた。

引越後約一年が経過し、暮らしながら住まい手自身による改修が加えられ、家への愛着と地域へ定着が促され、百年後も豊かな街並みの佇まいを残すこと

が期待できる。

このように、空き家を改修・活用し、必要十分な規模で暮らすことで、地域景観の維持・向上や自治会の若返り、自治体の活性化のモデルを構築することがねらいである。

●作品の概要

□設計者：辻充孝（岐阜県立森林文化アカデミー）

□施工者：T-PLAN 建築工房

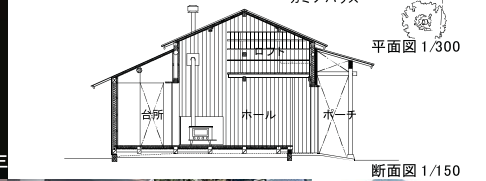
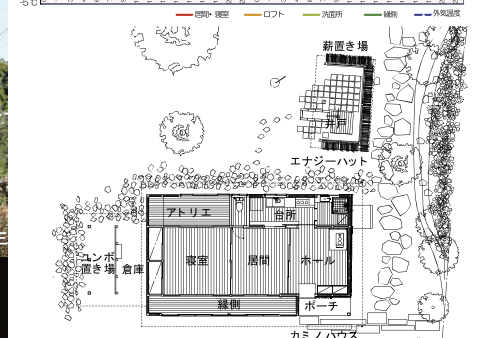
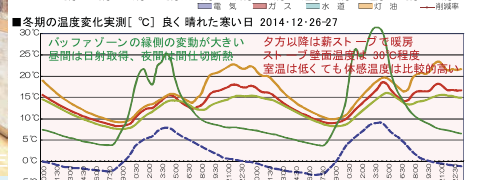
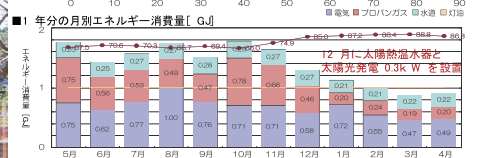
□計画概要

- ・計画地：岐阜県関市（省エネ地域：5地域）
 - ・敷地面積：2786.25㎡（842.84坪）
 - ・延床面積：68.48㎡（20.75坪）増築なし
 - ・構造階数：木造平屋建て
 - ・断熱性能：改修前UA値：3.47W/㎡K
 ⇒改修後UA値：0.84W/㎡K（413%アップ）
 - ・日射熱取得：改修前ηA値：8.9
 ⇒改修後ηA値2.9（307%アップ）
 - ・1次エネルギー消費量：改修前387.7GJ
 ⇒改修後54.3GJ（714%アップ）
- 省エネ基準は全て（断熱、日射遮蔽、エネ）クリア

●作品の特徴

建物の面影を残したまま、耐震、劣化対策、省エネ、温熱など建物の基本性能を向上させ、さらに住まい手によるDIYや、暮らしの様々な工夫で、省エネで心地よい豊かな暮らしを実践している。竣工後、住みながら行った主な取り組みとして、

- ・暖房：薪ストーブの設置・活用、ダブルハニカムスクリーンによる断熱強化、冬期に網戸取り外して日射取得アップ、縁側を断熱区画ゾーンに設定
 - ・冷房：全窓にすだれ設置し日射遮蔽、網戸取付による通風利用、DCモーター天井扇ゆらぎ気流
 - ・換気：風量調整機設置で料理別に風量調整
 - ・給湯：真空管太陽熱温水器をエコジョーズに接続し各給湯に活用、最寄りの温泉や銭湯活用
 - ・照明：太陽光発電外部照明設置、照明のLED化
 - ・家電：不要家電処分、電力見える化
 - ・調理：薪ストーブ活用、保温調理活用
 - ・その他：0.3kW太陽光発電+蓄電池で日常の補助電源と非常用電源確保、手押し戸ポンプ、薪ストック
- 住まい手自身が手を加えていくことで、暮らしやすさの向上に加え、家に愛着がわき、外構も含めた整備によって、より地域に溶け込んだ住まいとなっていく。



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

菜園付きエコアパート かたくりの里 とうべつ『空』

有限会社 ビオプラス西條デザイン 西條正幸

北海道当別町

2階建て4軒長屋住宅である。地元建材、特に木質系断熱材を多用し、地熱や雨水などの積極利用と同時に雁木による雪害対策など寒冷地生活に配慮する一方、室内では子供の生活空間の確保も可能となっている。

菜園付きエコアパート かたくりの里 とうべつ『空』

【応募者名】勤務先名・氏名：有限会社ビオプラス西條デザイン 西條正幸 勤務先住所：北海道札幌市北区百合が原4丁目8-1
 連絡先（勤務先） TEL：011-774-8599 FAX：011-774-8581 Email：eco@saijo-d.com

●地域性への配慮事項

所在地の北海道の当別町は、札幌市の北東に隣接している人口17,000人ほどの、農業を基盤とした田園都市です。気温は-20度まで下がる日もあり、冬には雪が多く特別豪雪地域に指定されています。この日本海側道央圏の気候に配慮しながら、冬の雪対策・高い断熱性能・北海道産の循環型資材を最大限に活用したエコアパートの建設を目指しました。住民間や地域のコミュニティが新たに生まれるよう、庭先に戸別の専用菜園、共同ハーブガーデンも設けました。これらの取り組みにより、若い子育て世代の住民を呼び込むことも期待しています。

●作品の概要

- 用途・構造規模 4戸長屋・木造2階建て
- 敷地面積 805.39㎡ (243.63坪)
- 建築面積 225.81㎡ (68.30坪)
- 床面積 344.38㎡ (104.17坪)
- 事業者 大澤産業株式会社
- 設計者 有限会社ビオプラス西條デザイン
- 施工者 武部建設株式会社

短期間の投資目的で、省エネや環境への取り組みが遅れがちな賃貸アパートですが、今回、環境に配慮した高いスペックを取り入れたことで、長期のコスト回収も可能になると考えます。ペレットストーブによる暖房、アースチューブによる給気、木質繊維の200mm外壁断熱など、多くの次世代の試みを取り入れたエコアパートです。今年度より2年間に渡り、北海道科学大学寒地環境エネルギーシステム研究所と共同で、建物の熱的性能の検証・室内環境の実測を行っています。

●作品の特徴

北海道産の木材・仕上げ材

木材は100%北海道産の無垢材を使用しています。構造材はクリ・カラ松・トド松、外壁材にカラ松と道南スギを使い、建具や家具にもトド松などの道産材を使用。内装材には噴火湾産ホタテ貝殻をリサイクルした漆喰、江別産のレンガタイルなどを使っています。地産地消、再生利用を積極的に行い、建設時の環境負担の軽減も目的としました。

自然素材の仕様

化学薬剤や合板類、新建材、ビニールクロスは一切使わずに、無垢のフローリングや和紙、漆喰で仕上げ、住む人の健康に負担を掛けない、安心・安全なアパートづくりを目指しました。それにより、解体・廃棄時の環境への影響も少なくできます。

ウッドファイバー200mm外壁断熱

北海道産の林地残材や間伐材をリサイクル利用したウッドファイバー断熱材を外壁に200mm充填しました。高性能グラスウールと同程度の断熱性能を有し、木材の特徴である調湿性能で、外壁内の湿度をコントロールできます。熱容量が高く外気温に影響されにくい点も特徴です。屋根断熱にも吹き込みタイプを300mm充填しています。

ペレットストーブによる暖房

間伐材や製材くずを原料とした木質ペレットは、化石燃料と違い再生可能で、全国どこでも製造できる地産地消のエネルギーでもあります。このペレットを燃料としたストーブを各戸に設置します。

アースチューブ給気とサーキュレーション

地熱を利用した熱交換を行うアースチューブを使った給気を採用しています。菜園の下に30mの給気パイプを埋め、冬の冷気を微量ですが地熱によってやわらげます。また、室内の天井付近に溜まった暖気を床下に送り込むサーキュレーターを設置しています。

土間の利用

庭先の菜園との内部のつながりを考えて土間のあるリビングを設けました。南面の日射を取り入れ、土間に蓄熱させることで、室内の温熱環境に役立ちます。

若手大工の育成

工務店が若手大工の育成に熱心な事もあり、棟梁は大工歴9年の若手が担い、随所に伝統の継手や仕口を取り入れた、技術の継承・向上に役立つ場になりました。

専用菜園とハーブガーデン

郊外の広い敷地条件を生かして、除草剤や農薬を使用しないルールを定めた菜園とハーブガーデンを設けました。快適な住環境を作りながら、コミュニケーションの場として役立つように考えています。

雨水利用

ドラム缶を再利用した雨水タンクを設置し、菜園に利用します。未使用時やオーバーフローの雨水は暗渠管に流されます。

雪対策の厩木

冬季の歩行や作業スペースのため、雪除けの屋根を設けました。内部と外部の緩衝空間として役立ちます。

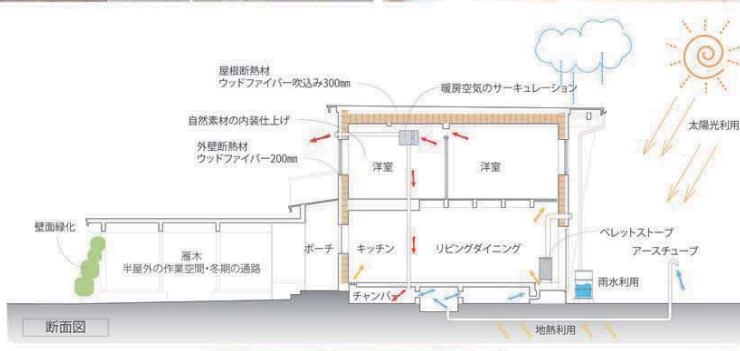


南面外観：外壁は主に北海道産のから松材と道南スギ材を使用。手前に専用・共同菜園が広がっている

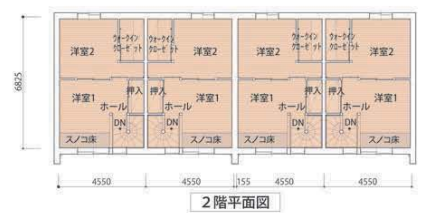
土間空間の利用：リビングと菜園をつなげるように土間を設けている。北海道江別市のレンガタイルを敷き、冬の貴重な日射の蓄熱も目的



雪対策の厩木：豪雪地帯のため、雪よけの屋根を設けて冬場の歩行・作業スペースを確保
 専用菜園：1戸あたり約7.5坪、完全無農薬がルール



断面図



2階平面図



1階平面図



配置図



1階内観：建具、家具も北海道産木材を使用している



2階内観：ホタテ漆喰と和紙、無垢のフローリングで仕上げた内装。



若手大工の育成：随所に伝統工法の継手や仕口を取り入れて技術の継承を試みている



ウッドファイバー断熱材：外壁側に下地を組んで、付加分のウッドファイバーを充填している



サーキュレーションボックス：冬期は手動で床下方向へ空気の排出方向を切り替え



ペレットストーブ：煮炊きのできるタイプを標準装備し、北海道産のペレットを使用



アースチューブ：積雪量が高い位置に給気口を記し、菜園の雨水を30m配管している



雨水タンク：再利用品のドラム缶で製作し、ためた雨水を菜園に利用

内部の仕上げ：北海道産火焔産のホタテ貝殻を再利用した漆喰を、全ての居室に使用している

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

未来へ、先人の技をつなぐ「結い」の家

株式会社 建築工房匠 代表取締役 福迫健

鹿児島県鹿児島市

鹿児島湾に面する住宅で省エネ地域7に対応している。地域の材料を用い、職人との連携を図り伝統的技術技法を取り入れながら、長期優良住宅認定を受けた和風建築として施主の要望に応えている。

未来へ、先人の技をつなぐ「結い」の家

【応募者名】 福迫 健 勤務先名：(株)建築工房 匠
連絡先(勤務先) TEL：099-264-2034 FAX：099-264-2134

勤務先住所：鹿児島県鹿児島市宇宿5丁目30-2

●地域性への配慮事項

建設地は過去5年間の夏季最高気温35.5度、台風が多く高温多湿、薩摩半島の山並みと鹿児島湾にはさまれた平坦地。冬場は比較的温暖な地域。クライアントの希望するライフスタイルを考慮し自立循環型住宅の手法を採用。南面に大きな開口と深い庇を出し、日射取得と遮蔽に配慮。外壁の一部は蓄熱・蓄冷・調湿を狙い木目舞パネル方式の土壁とし、日射熱取得と採光の為居間上部に吹き抜けを設けた。夏季の換気用に開閉できる高窓を設置、台風対策に開口部にシャッターと雨戸を設けた。

外観は街並みに風情を与える「和」のデザイン。クライアントの「将来は高齢者・障がい者の憩いの場所にしたい」との意向に合わせ、コミュニティの場としての活用も想定。“地域と結ばれ、古いものに新しい生命を吹き込み、住まう人・訪れる人を心身共に癒す「結い」の家”が完成した。

●作品の概要

竣工年：2014年

敷地面積：249.04㎡ 建築面積：112.37㎡

延床面積：155.04㎡ 構造：木造(在来工法)

省エネ地域7:q値 273W/(㎡・K)

●作品の特徴

外観は、堅格子を強調した町屋の趣を醸す2階建て。内装には大正時代物の建具、欄間などを再利用。天井は十文字に組んだ“太鼓梁”、小屋裏現し仕上げ。屋根断熱性能と耐震性を確保しながら、開放感と伝統美を追求した家となった。

□「結い」の家の5つの特徴

- 1、伝統と新技術が融合した快適性能
古民家風でありながら実は認定長期優良住宅。耐震等級3、耐風等級2、温熱環境については断熱等性能等級4(H25基準)。夏季は卓越風を利用し設備に頼らず熱負荷が少ない環境が持続。冬季はエアコン1台のみで家全体が効率よく暖められヒートショック予防に配慮した。
- 2、林業・製材所・左官・大工 地場産業が手を結ぶ
外壁に施した土壁の原料は鹿児島島の土。左官職人が土づくりから行い、土壁の文化を継承し、保存する場となった。弊社は今後も独自の「かごしま土壁再生プロジェクト」に継続的に取り組んでいく。木材は、鹿児島県認証かごしま材を使用しCO2を固定。製材段階の木くずは乾燥時の燃料としてリサイクル。使い勝手が悪いと敬遠されるスギ大径材(構造材)を積極的に使用。林業関係者とタッグを組み、流通コストの削減にも取り組んでいる。

3、自然素材で、人の心と体が整う健康住宅

外構やアプローチに玄昌石、鉄平石、溶岩タイル用いクライアントの心安らぐ場として、庭には水琴窟を施した他、植栽した木による微気候のコントロールを狙った。

化学物質に過敏なクライアントの「家に帰るのが楽しみ、心身ともにリラックスできる」の言葉が地域で建築に関わった者たちへの励みとなった。

4、バリアフリーで人と人を「結ぶ

北側に竹の植え込みと、室内まで連続するスロープを設け車いすのまま入室可能。住宅としてのプライバシーを保ちながらも、緩やかに外部とつながっている。続き間で腰掛けやすい小上がりの畳の部屋には引出式の踏み段を設けた。車いす対応のホームエレベーターも設置。階段は蹴上を低くし、高齢者にも配慮した。

5、「結い」の家を支え、未来へと継承される技

伝統ある建具に、新しい“デザイン、形状、色、仕掛け”を時間をかけて組み込んだ。曲り材の使用や水琴窟製作過程の木や石の見立てから、大工の技法継承にも努めた。受け継がれてきた技と、断熱や耐震等の新しい技術を融合させ、住まい手にこれからのライフスタイルを提案し続ける事が、我々地域に根差す工務店の責務であると考え、これからも取り組んでいきたい。




2階平面図

1階平面図



当該住宅と鹿児島市の温湿度比較グラフ

↑エアコン(1台)による間欠暖房
↓手間のかかる化粧二重屋根 鹿児島産の杉大径木からとった材!



↑断面計画概要
伝統的な意匠、耐震・耐風性、そして断熱性能をしっかりと確保できる設計となった

省エネルギー地域区分7
 外皮平均熱貫流率(UA): 0.65W/(㎡・K) ≤0.87 (H25基準)
 冷房期平均日射熱取得係数(ηA): 1.8 ≤2.7 (H25基準)
 単位温度差あたりの外皮熱損失量(q): 273W/K
 熱損失係数(Q): 2.25W/(㎡・K) ≤2.7 (H11基準)



この家の省エネ性能
一次エネルギー消費量 387 MJ/(㎡・年)

自立循環型住宅への設計ガイドラインによる省エネルギー効果：削減率 35.9%



外観 北側より玄関・アプローチ方向を見る↑



土壁塗り体験! 子供たちも大はしゃぎ



↓水琴窟の製作



↑採掘現場での土づくり
荒塗り後の土壁→

↑設計の工夫から大工の手刻み、土壁や石材などの左官、自然塗料にこだわった木部塗装、水琴窟の設えや木々の配置に至るまで先人の知恵を受け継いだ職人たち伝統の技でつくり上げる“本物”こそが我々が築いてきたサステナブル建築と言える。



←現しの垂木、はめ込まれた古建具
エレベーターホールは広めに確保

↑和風モダンな内部意匠。手前はスロープ



↑微気候のコントロール。南面の落葉小高木 出幅90cmの軒庇↑



↑竣工後の放射温度測定の様子



↑滑車で上下開閉する障子戸。夏場の熱気対策

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

水俣エコハウス ～足るを知る普通の家～

すまい塾古川設計室 古川保
水俣市産業建設部都市政策課建築住宅係
篠計画工房 篠節子

熊本県水俣市

高温多湿な地域にたつ伝統工法による住宅である。真壁構造、大屋根、三和土、土壁の採用など、木造建築の自然素材を資源循環の立場から再評価し活用している。言わば現代社会における伝統建築の持つすまいづくりでの優位性を再認識した作品と言える。

水俣エコハウス ～足るを知る普通の家～

【応募者名】勤務先名：すまい塾古川設計室

勤務先住所：熊本県熊本市南区川尻4丁目10-5

連絡先（勤務先） TEL：096-357-0973 FAX：096-357-0973

●地域性への配慮事項

水俣は全国的には温暖な気候で、年間雨量は2200^{mm}と多く、高温多湿な地域です。水俣病を経験した市民は、一旦断絶された人と人との関係、自然と人の関係を取り戻すために「もやい」思想を見直し、自然と人の持続可能な社会の形成を目指しています。

水俣のこの温暖な気候を生かすには、窓を開け放ち、内部と外部を緩やかにつなぐ縁側を介して自然がもたらす四季折々の風景を感じながら地域の人とのコミュニケーションが生まれる家がよいと考えました。さらに水俣は、杉と桧の産地でもあり、昔ながらの技術を受け継ぐ職人がたくさんいます。その技術を生かすためにも、地元の職人が地元の木・土・紙を使って伝統的な構法でつくるのがよいと考えました。

●作品の概要

水俣エコハウスは、夏は暑くない程度、冬は寒くない程度の「足るを知る普通の家」です。かつての日本人がそうしてきたように生活の知恵によってエネルギーを極力使わない住まい方を提案しています。それは、機械設備の性能によってエネルギーを効率的に使うことではなく、人間側がそれを判断し、エネルギーを使うことを大事にしたいからです。「足るを知る」とは『自分の身分をわきまえてむさぼりの心を起こさぬこと』であり、自然と共に暮らしてきたかつての日本人の心には自ずと備わっていたものです。必要以上の性能を追求せず、エネルギーを極力使わない住まい方

が次世代にも持続可能な、人にも地域にも地球にも優しい循環型社会の生活です。

●作品の特徴

建築時も使用時もエネルギーを極力使わず、さらには処分時も煙と土に還る伝統構法の家です。

◇**山の木に合わせた設計寸法** 曲がり木は梁に、直材は柱に使用。大きさと長さは山の木に合わせてまず材料ありきの適材適所に配置します。

◇**足下の解放** 柱を優先させた足固め工法で床下の風通しを良くし、薬剤を使わないで白蟻に対処。

◇**木組み** 長持ちを考えると木は木で留めるのがよいと考えます。大工の手刻みで昔ながらの継手と仕口・込栓で木を組み上げます。

◇**貫と竹小舞と土壁** 貫は柳の木のように柔らかく粘って地震に耐える構造要素です。土壁も構造要素でありながら、夏はその調湿効果でひんやりと、冬はその蓄熱性能で暖かさを持続する温熱要素にもなる優秀な素材です。

◇**深い軒と縁側** 夏の直射日光や風雨から守ってくれるだけでなく、そこから見える四季折々の景色、近所の人たちとの交流が私たちの心を豊かにしてくれる外部との緩衝空間です。

◇**調湿** 土壁、三和土、藁床畳、手漉き和紙障子、杉床、漆喰壁と全ての素材に調湿効果があります。

◇**通風** 南の大開口から北窓、吹抜けを介して2階へと風が抜け、木製の面格子付網戸や無双窓からは

昼夜問わず風を採りみず。

◇**緑の効果** 草木、低木、中・高木により地表面温度や地表面近くの気温上昇を抑えます。

◇**涼** 通風と緑の効果、玄関の三和土に水を撒くなど相乗効果で、エアコンなしの扇風機だけの生活です。

◇**暖** 薪ストーブで暖をとり、土壁の蓄熱効果で暖かさを持続します。

◇**断熱** 壁/床：杉の樹皮でつくった断熱材。

天井：建築中の廃材の鮑屑を断熱材に使用。

窓：内障子をはめペアガラス以上の性能を確保。

●水俣エコハウスの現在の取組み

①気候風土にあった快適な「住」環境づくりや、伝統構法による技術の継承を支援するために、市民が地元の資源（木材、製品、業者、職人等）を活用してつくる「環境配慮型住宅」を建築（新築・増築）への補助

②家庭菜園、コンポスト、薪ストーブの利用法などを市民とともに学ぶワークショップを開催

③省エネルギーや環境配慮の暮らしを考える「エコライフセミナー」の実施

④季節を感じるイベントの開催

⑤夏の暑い日の暑い時間に通風による涼で快適に暮らすための「灼熱セミナー」を毎年8月に開催

⑥地元の職人による地元の工業高校建築科学生への伝統構法による物置建設指導をし、その後は林業科学生に対しても材料・工法のセミナーを実施

家裏の手作り食品を保存しておく場所です。

ゴミ分別のボックスや、高い器具入れのための物置、もやいボードでつくります。

面格子がついた下の窓は、夜明けたまままで涼をとります。

床下点検口は夏には床下の涼しい風を呼び込みます。冬は窓の上に厚布団を敷いて暑さを防ぎます。

リユース交換用やシコをだして交流する場です。壁は西側の風散効果も期待できます。

土壁の生肌系に合った4種類の低木の生け掛けです。通風の効果を期待します。

協議会と民間ワークキャンプの共同製作でつくれた竹のシートです。

土間の土台は古木の板です。三和土は水をまきをして固まってきました。

有線野良は完全で美味しい。野菜づくりも楽しみます。

地元の職人の思いのこたの和紙の生け掛けです。調湿・消臭効果があります。

家族の機織りや成長に合わせて変更できる家具間は併存しています。

無染土の壁と藁床は断熱効果と調湿効果があります。

夏の西日はガラリ障子でコントロールします。2カ所の家で風通しをします。

空気のムラを和らげる天井網

～水俣エコハウスの現在の取組み～

- ①環境配慮型住宅の推進・補助
- ②家庭菜園・コンポストづくり
- ③エコライフセミナー
- ④和風づくり体験
- ⑤灼熱セミナー
- ⑥地元の職人による学生指導

建築材料のゆくえん

↓地産地消

水俣	熊本県	九州地方	日本
構造材、内装木材 製作家具 木製床具 和紙、障子紙 三和土 市瓦 天井断熱材（カンナ桐） 薪 イスノキ・吾竹樹木 大工・修繕職人	イブシ瓦（熊本） 藁（八代） 土壁用土（小川） 小舞竹（八代） かんな桐（熊本） 造作障子（熊本） 陶器製洗面ボール（熊本）	しっくい材料（福岡） 木製スリッチプレート （佐賀） 衛生機器（北九州） 樹木（出水）	壁紙断熱材 ファレストボード（秋田） タイル（愛知） エゴマ油（岡山） アルミサッシ（富山）

使用場所	材料	産地
構造材	杉	熊本
断熱材	瓦	土
断熱材	カンナ桐	土
断熱材	フォレストボード	熊本
内装	土製り障	熊本
内装	木製障子	熊本
内装	和紙障子	熊本
内装	藁イグサ	熊本
内装	瓦タイル	土
土製	三和土	土
外装	和紙障子	熊本
外装	障子	熊本
外装	ガラス	リサイクル
電気	照明LED機器	多岐

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

都市型プロトタイプ住宅「木箱 212」

葛西潔建設設計事務所 葛西潔

東京都杉並区

市街地小宅地に提案された住宅である。両側全面開放を1方向門型木造ラーメン構造により確保している。主構造の「箱」は同一部材を活用して室内の通風性能、収納空間を確保し、単純な外形は容易に外断熱工法の効果を発揮できる。

都市型プロトタイプ住宅「木箱212」

【応募者名】勤務先名：葛西潔建築設計事務所 葛西潔 勤務先住所：東京都杉並区久我山3-26-5
 連絡先（勤務先） TEL：03-3247-3041 FAX：3-3247-3042

●地域性への配慮事項

都市部の住宅問題から開発した木造構法

都市部の宅地は小さいものが多く、狭小敷地に建つ住宅は奥行に対して間口が狭い傾向にある。このような住宅では間口に出入り口と採光・通風の窓を設けると同じ面に耐震壁を設けることは難しい。

また、現在の住宅は家族の将来的なライフスタイルの変化に合わせられるよう、間取りの可変性を考え、内部の壁を少なくする傾向がある。

現代の住宅の求める開放性と、木構造が必要とする耐震壁の存在とはそもそも矛盾する部分がある。

この現状を踏まえ、当事務所では木造一方方向ラーメン造「木箱212構法」を開発した。開放性、間取りの可変性、耐震性、省エネルギー性を備えた、この新たな構法を新たな都市型住宅のプロトタイプとして普及させるべく、100棟建設を目標に建設し続けている。現在81棟が完成し、2005年には特許を取得した。（※特許番号 第3679748号「木構造における耐震性フレーム」）

●作品の概要

「木箱212構法」のしくみ

規格部材2×12（ツーバイトゥエルブ）材を柱と梁

に使用し、ラグスクリューを用いて門型フレームをつくり、4.55mmピッチで並べてトンネル状の架構を形成する（LVL、集成材でも可能）。次に、奥行方向に構造用合板を貼り耐震壁をつくる。一方向の外周壁にしか耐力壁を設けていないため、間口方向は門型フレームだけで持ち、内部にも構造要素を持たない。

●作品の特徴

一方向ラーメン造

内部に構造要素を持たないため、壁や間仕切りのない開放的な一室居住空間が実現する。現代の家族は一緒に過ごす時間が少ない。せめて家にいる間は互いの気配を感じながら家族と一緒に過ごせるよう、大きな「家族室」を提案している。

南面全面開口

間口方向は門型フレームだけで持たせているため、全面開口が可能になる。冬は太陽光を室内に最大限取り込み、夏は南北の開口を開けることで室内に風の通り道をつくる。採光・通風を確保することで年間を通じた冷暖房エネルギーの削減に繋がる。

省エネルギー性

柱、梁に同一部材を使用し、余った端材は棚板やスパーサーに利用するため、施工段階で無駄な材が出ない。

基礎を含め外断熱とし、次世代省エネルギー基準、ペアガラスを標準仕様とする。

短い通電時間で1日中全館暖房が可能な土壌蓄熱式床暖房を施工。

柱を利用した壁面収納

表しになった柱の間に棚板を渡すことで壁面全面が収納壁になる。

良好な室内環境

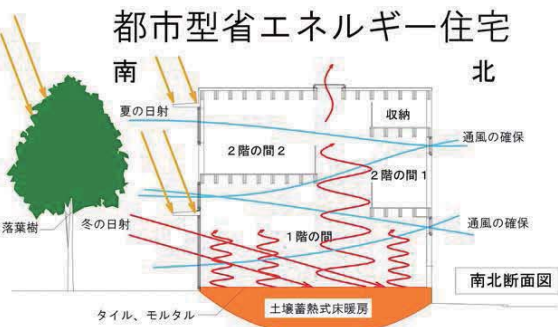
室内側は柱、梁を表しにしている。仕上げ材を貼らず木を直接空気に触れさせ耐久性を向上させる。室内の調湿効果も期待できる。基礎を高く立ち上げることで薬剤を用いずに防腐・防蟻に対処している。

●新たなプロトタイプが目指す街並みづくり

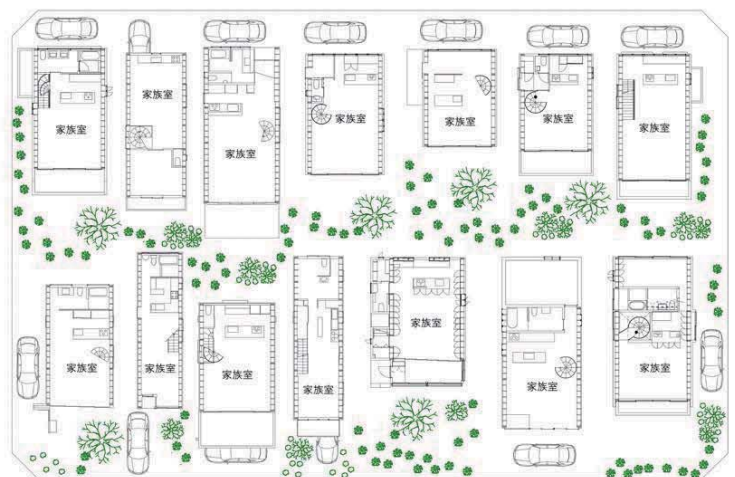
柱、梁に同じ部材を使い、仕口は1種類という合理的な簡易工法のため、材木の輸入、構法の開発、設計、施工と家づくりのすべての工程を当設計事務所で行っている。

同じ職人グループが同じ構法を手掛け続けることで新たな伝統になっていく。都市部の宅地の問題を解決する新たな都市型プロトタイプとして広め、現代の都市部の混沌とした街並みから、新たな街並みづくりを目指したい。

都市部の狭小敷地でも採光・通風を確保する南面全面開口



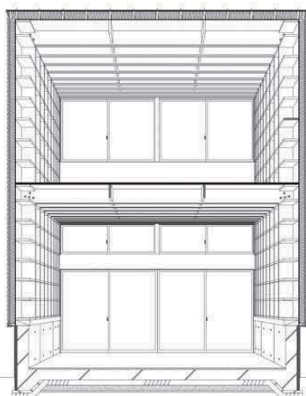
都市型プロトタイプによる街並みづくり



柱を利用した壁面収納



断面パース



基礎を含め外断熱、次世代省エネルギー基準。



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

大宮ヴィジョンシティプロジェクト みはしの杜

株式会社 中央住宅
ポラスタウン開発 株式会社

埼玉県さいたま市

埼玉県大宮市にある戸建て住宅地開発で、住宅と区画道路配置に
通風、遮風対策を施している。住環境を確保するため卓越風方向
と直角に道路を配置し、植栽設置と併せ団地内風環境を制御しつ
つ5つの街区環境を提供している。

大宮ヴィジョンシティプロジェクト みはしの杜

〔応募者名〕 勤務先名：株式会社 中央住宅 住所：埼玉県越谷市南越谷 1-21-2 ポラスビル 3F 連絡先（勤務先） TEL 048-987-6333 FAX 048-987-8130
 勤務先名：ポラストウン開発株式会社 住所：埼玉県さいたま市南区沼影 1-12-1 ナリアガーデン B203 連絡先（勤務先） TEL 048-872-8230 FAX 048-872-8231

●地域性への配慮事項

政令指定都市さいたま市のほぼ中心に位置する大宮区にあり、大宮駅を最寄駅としながら、計画地西側には三橋総合公園や鴨川が近接する自然環境に恵まれた立地条件であるという特徴を最大限に活かした街区設計、各住宅への様々な省エネ手法や取組みの採用による環境配慮型住宅団地開発を目指し、平成 25 年度第 1 回省 CO2 先導事業に採択された。

●作品の概要

所在地：埼玉県さいたま市大宮区三橋 1 丁目
 用途地域：市街化調整区域
 （第 2 種低層住居専用地域に準拠）
 開発面積：25,330㎡
 住宅棟数：125 棟
 敷地面積：150.24～151.94㎡
 住宅面積：89.01㎡～120.07㎡
 公園面積：1,500㎡
 着工時期：平成 26 年 1 月～平成 26 年 9 月
 竣工時期：平成 26 年 6 月～平成 27 年 2 月
 設計監理：㈱中央住宅、ポラストウン開発㈱
 施工：ポラテック㈱

●作品の特徴

①環境配慮の街区計画

- さいたま市の気象データや周辺環境を分析して、様々な夏の通風利用と冬の遮風対策を施したものとし、CFD 解析を行った上で決定した。
- ・鴨川や三橋総合公園の緑による涼風を採入れる等、立地環境を活用。
 - ・隣棟間隔を 1.8m 以上とするなどの複数の建物配置の工夫による通風配慮。
 - ・高木を多く植える街区を街の中心に配置し、緑の多い公園とともに街全体の空気を冷ます植栽ボリュームゾーンを意識。
 - ・北東からの有用風を採り入れる為、公園を北東から南へ 3 箇所に分散してつなぐ配置。
 - ・隣棟間に防風樹木を植栽、北側開口を極力減らし冬の季節風を防ぐ配慮と、南北道路を減らし強風を防ぐ配慮。
 - ・街全体の通風効果を最大限に活かすため、採風に配慮した各棟プランニングの実施。

②街区のカテゴリー分け

計画地内を 5 種類の街区分けを実施し、様々な環境

趣向の住まい手に対応する選択肢の提供を行った。

【先進街区(技術や設備による省エネ趣向)】

ZEH 街区, 次世代街区

【パッシブ街区(ランドスケープによる省エネ趣向)】

杜の街区, 公園の街区, 木立ち街区

③住宅の省エネルギー手法

全 125 棟が低炭素住宅認定基準に適合するように設計した上で、ZEH 街区については太陽光発電やハイブリッド給湯器等の搭載による ZEH 化仕様とした。また、全棟に HEMS を搭載し、地域気象データと連動した採風アラート機能や、積極的に緑と関わる活動、省エネアドバイス等の様々なライフサポート情報を提供して、省エネ行動への誘引を意図した。

これらの取組みにより、CASBEE 評価は ZEH 街区で S ランク、他の街区で A ランクとなった。

④フード&グリーンサイクル

「雨水利用→家庭菜園、果樹の植栽→料理に利用→コンポスト」の一連のサイクルを居住者が実践し、積極的に緑と関わり、楽しみながら省 CO2 に取り組む様に誘引するための活動として提案し、全棟に家庭菜園 4㎡以上、コンポスト、雨水タンクを設置している。



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

コアハウス 牡鹿半島のための地域再生最小限住宅 板倉の家

東京工業大学 アトリエ・ワン アーキエイド半島支援勉強会
コアハウスワーキンググループ 塚本由晴

筑波大学 アトリエ・ワン アーキエイド半島支援勉強会
コアハウスワーキンググループ 貝島桃代

有限会社 アトリエ・ワン アーキエイド半島支援勉強会
コアハウスワーキンググループ 玉井洋一

宮城県石巻市

牡鹿半島に建つ、東日本大震災の災害復興漁村住宅である。漁民の生産手段確保を優先し、生活向上に対応しつつ増改築可能な住宅設計計画であり、規模を必要最小限に抑えながらも初期の建設投資の軽減を目指している。また地域の豊富な植林木材資源を多く利用し、内外装共に木の良さを感じられる住宅である。

コアハウス 牡鹿半島のための地域再生最小限住宅 板倉の家

【応募者名】勤務先名：アーキエイド半島支援勉強会コアハウスワーキンググループ

勤務先住所：東京都新宿区須賀町 8-79

連絡先（勤務先） TEL：03-3226-5336 FAX：03-3226-5366

●作品の概要

漁業を生業とする牡鹿半島の浜では、東日本大震災の津波によって大きな被害を受けた。住民との対話から、漁業従事者は漁船や漁具に費用がかかるため、当初住宅建設費用に限られる現状がわかってきた。人口流出に歯止めをかけるには廉価な住宅建設の可能性を早急に提示する必要があった。

そこで、スマトラ沖地震津波の被害地域で提案された「コアハウス」を参考に、最初は小さく建てライフスタイルの変化に合わせて徐々に増築できる木造住宅を開発した。設計に当たっては、山と海に囲まれた牡鹿半島らしい漁村風景の再建を考慮し、地域の森林資源と農、漁業者の生業を結びつけることを試みた。漁村の生業を映した家並みが連続すれば、半島の美しい自然の景観とともに、重要な観光資源となるはずだ。そこで伝統的な漁師住宅の間取りを踏襲し、外から入れる浴室や魚を直接運べる勝手口、冬でも洗濯物を干せるサンルーム、縁側、土庇空間などを取り入れることに留意した。こうした要素により、通りからでも中の様子がうかがえるような場をデザインし、コミュニケーションの活発化をめざした。構法には日本の伝統

的な建設方法である、板倉構法を採用した。落とし板同士をあらかじめ工場で接合することによって、現場での作業時間を短縮できるので、震災復興に地域工務店の力を導入しやすくなる。また在来木造の1.6倍の木材を使用するので、地域木材資源の活用にも貢献し得る。建設過程や竣工状況を共有するための見学会と勉強会も開催した。これにより、地域に根ざした持続性のあるネットワークの構築を意図している。

2012年12月、モデルハウスが石巻市桃浦に竣工した。モデルハウスの実現のための募金や協賛を募る事を通して、東日本大震災の復興における問題を、産業界や海外の人々に発信する機会にもなった。現在は現地見学会、地域工務店との勉強会を継続し、高台移転完成後の建設に向け、住民と協議を進めている。

●地域性への配慮事項

牡鹿半島漁村の暮らしに配慮するため、牡鹿半島のデザインサーベイを行い、パタンブックを作成した。ここで明らかになった伝統的な漁師住宅を参考とした。また地域の山に植林されている杉材の活用を想定し、板倉構法を採用した。東北地方で古くから神社、仏閣、倉などで採用されてきた構法で、大工の伝統技

術を応用した構法である。地元工務店の人材不足を鑑み、プレカットにより、工期短縮が可能となった。杉の一枚板に木ずりを貼る事により構造壁とし、木のぬくもりを感じさせるとともに調湿効果にも考慮した。外側に断熱材を施す事で、高断熱化などにも対応した。屋根は建設の合理化を図りつつ、空間に多様性をもたらすため、一部ロフトを設けられる、片ながれとした。

●作品の特徴

地域ではかつてから漁の収益やライフスタイルの変化にあわせて、増改築が繰り返されてきた。こうした習慣や地域工務店と浜の関係性を持続的に考えるため、増改築できる仕組みを考えた。基本プラン、田の字プラン、分棟プランなど、段階的な増改築を想定している。

コアハウスは牡鹿半島以外に、東日本大震災の地震、津波被害を受け、原子力発電所の事故による放射能汚染により避難を余儀なくされている南相馬においても検討した。2013年1月、南相馬コアハウスを南相馬の半農半漁の暮らしと地域の伝統的な家並みから倉庫つきの切妻屋根で計画提案し、この分棟プランを2015年5年同小高区塚原公会堂として落成させた。



コアハウス外観



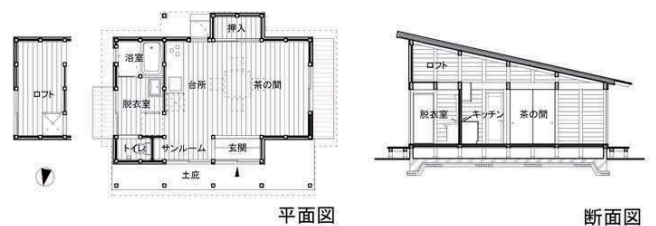
サンルームより茶の間方向を見る



板倉構法

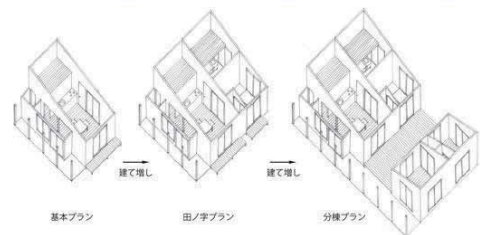
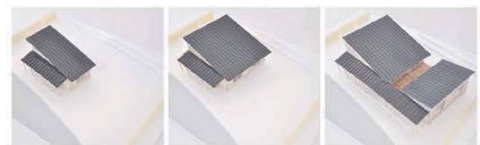


茶の間よりサンルーム方向を見る



平面図

断面図

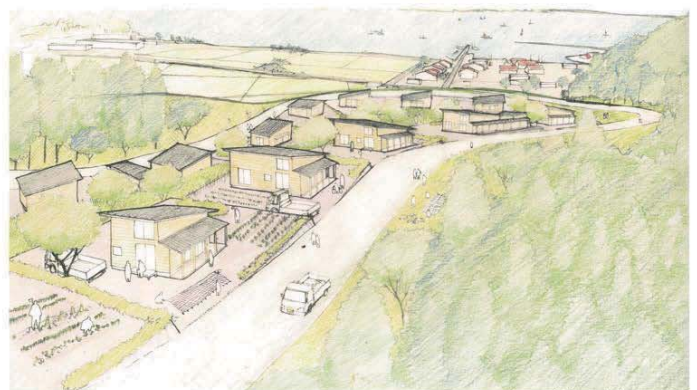


基本プラン

田ノ字プラン

分棟プラン

増築のプロセス



コアハウスが並ぶ高台の風景

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

黒壁と出格子のある蔵のような家

株式会社 けやき建築設計 畔上順平

埼玉県加須市

伝統文化が色濃く残る埼玉県加須市にたつ在来工法の和風住宅である。外観は伝統的町屋であるが、良質なことで定評のある山形県金山町内で伐採、製材、乾燥（主に自然乾燥）された金山杉を用い、材木で8割程度を現地でプレカットして使用している。この原材料産地との連携が、強度に優れ、美しい高品質の材料の確保と工期短縮やコスト削減に効果を発揮した例である。

黒壁と出格子のある蔵のような家

【応募者名】勤務先名：株式会社 けやき建築設計 畔上順平

勤務先住所：埼玉県越谷市東越谷1-8-12

連絡先（勤務先） TEL：048-966-2268 FAX：048-954-7484

●地域性への配慮事項

中山道と日光街道を結ぶ脇往還の宿場町であった埼玉県加須市の中心市街地は、江戸時代には関東三大不動の一つ不動ヶ岡不動尊總願寺の門前町として繁栄し、伝統ある文化財や歴史を物語る遺産が数多く残されています。この家はその地域の近郊に建っています。

建主さんは生まれ育ったこのまちの中に新築住宅を計画しました。現代的な暮らしを求める一方、建物の中にこのまちの記憶を残す事を想い、今も僅かに残る店蔵の趣を建物の外観に取入れました。当時の厨子（つし）2階の雰囲気を出す為に階高を抑え、道路側からのプロポーションを重視しました。黒漆喰の外壁と木格子には、江戸時代以降賑わいをみせた宿場の面影があります。古いまちを愛する建主さんの気持ちが滲み出た住宅となりました。

●作品の概要

埼玉県加須市は県東北部に位置する平野部で、夏は高温になる日も多く、冬は北西からの冷たい季節風が強く吹くので厳しい自然環境に配慮する必要があります。敷地は北側一面接道で、南北に長い敷地です。

南北通風を妨げる中廊下はつくり、地元に残る店蔵を参考に、上屋4間×4間に下屋の付帯するシンプルな構造としました。敷地形状、風土的特性に加え、2間（約3.6m）を使用木材の基本長さにする事で丸太の分厚い、搬入や建方効率の良さなど時間と金額のスマート化を図りました。

お子さんも小さく、若い建主さん夫婦の現状を考慮し出来る限り間仕切り壁を設けないように心掛けました。2階はほぼワンルームのオープンスペースとし、7割程度の完成度に留めています。 unnecessary初期投資を減らし必要な時期に間取りをカスタマイズ出来るように準備しました。

●作品の特徴

二つの地域との関わり

先に述べた地元地域への想い、宿場の面影を残した黒漆喰と出格子の顔は加須地域の歴史につながる一つの形となりました。そしてもうひとつ、杉の名産地である山形県金山町との強いつながりがあります。大工による手刻みの家づくりは、山側で行う木材の加工は2割程度で、残りは作業場や現場で行います。しかし、この家では材料加工の8割を山側で行い、現場作

業の短縮化やコスト削減、現場の作業スペース縮小が実現できました。このシステムを成立させるためには、山側との信頼関係と綿密なやりとりが必要です。今後、益々制約が増える首都圏都市部における木造住宅供給の試みとして木材産地との連携体制が欠かせません。

温故知新の家づくり

この家の形、材料、構成要素はこの地域に残る古い木造家屋が見せる景観的特性、風土的特性を素直に受け入れ、組み合わせただけに過ぎません。現代の長寿命、省エネルギー住宅を考えるにあたり、まず事実として残っている、地域の古い建物から学ぶ事が大切だと思っています。そして現代生活に足りない部分を付加し、改善する事で安全で快適な住環境を整えています。

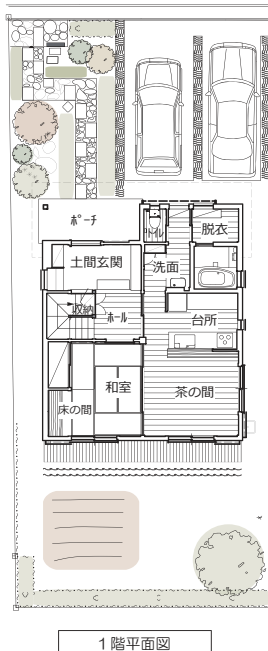
この建物では耐震等級2の耐震性を備え、基礎断熱、床下暖房など、新しい技術やシステムも積極的に取り入れています。住まい手に長く愛されてこそ、地域に根付く長寿命で省エネルギーな住宅といえるのではないのでしょうか。



茶の間・和室を見る

内部仕上表

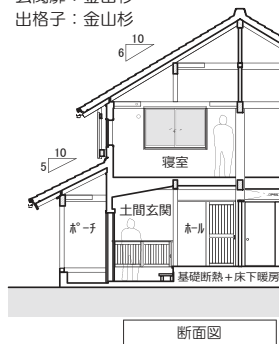
床：杉無垢板張り 和室 壁：土壁塗り仕上
 壁：和紙クロス貼り 和室天井：杉浮造板
 天井：杉パネル板張り 目透し張り
 構造材・造作材・羽柄材：金山杉



1階平面図

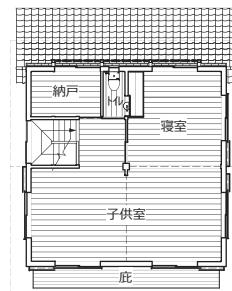
外部仕上表

屋根：三州燻し和瓦葺き
 北外壁：黒漆喰仕上 角面・白
 南外壁：焼杉板目板張り
 玄関扉：金山杉
 出格子：金山杉



断面図

織部好みの石畳と
 植栽に囲まれた苑路



2階平面図

外構仕上表

ポーチ：砂利入色珪外洗出し 門扉：なまこ壁（下部）
 カポット：砂利入色珪外洗出し 土佐漆喰（上部）
 見切：瓦小端立て



カポット見切は
 瓦小端立て

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

熊谷の家

亀倉治（株式会社小林建設）

埼玉県熊谷市

関東平野内陸部に位置し夏の高温、冬の強風で名高い地域にたつ大規模住宅の建て替えである。解体した木材を極力利用し、省エネ地域区分 6 地区に対応しつつ地域に伝わる伝統的在来木造の外観を維持した住宅である。

熊谷の家

【応募者名】 勤務先名：株式会社小林建設 亀倉治 勤務先住所：埼玉県本庄市児玉町児玉 2454-1
 連絡先（勤務先） TEL：0495-72-0327 FAX：0495-72-5875

●地域性への配慮事項

埼玉県熊谷市の夏は日中かなりの高温になり、雷の発生の発生が多い地域です。冬は北西の季節風が強く、晴天の日が多く空気が乾燥します。特に夏は2010年には41日猛暑日を観測し、2007年は当時の最高気温40.9度を観測した地域です。また冬は市街地から外れた地域であるため『赤城おろし』が直接吹き下ろしてきます。当然、夏をいかに涼しく、冬をいかに暖かい住いにすることがテーマとなります。

まだまだ周囲には昔ながらの家が点在しており、今回の住まいも築50年の建物を解体しての建て替えであり、既存の門をそのまま生かし周囲と調和のとれる外観、また既存の木材をなるべく利用していくように心掛けました。

●作品の概要

- 所在地 埼玉県熊谷市
(都市計画区域内 市街化調整区域)
- 区分 6地域 (IV b 地域)
- 用途 専用住宅
- 構造 木造2階建て
- 面積 敷地面積：300.17㎡ (90.80坪)
建築面積：119.78㎡ (36.23坪)
1階床面積：112.34㎡ (33.98坪)
2階床面積：63.76㎡ (19.28坪)
延床面積：176.10㎡ (53.27坪)
- 設計 株式会社小林建設
- 施工 株式会社小林建設

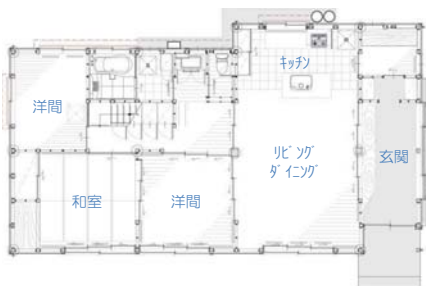
●作品の特徴

夏の対策として、東側に網戸付の木製の格子戸を設け午前の日射を遮り通風を考慮しました。風が抜ける様に内部の建具をすべて引戸とし、この地域でもよくある腰屋根を付ける事で上部からも熱気が抜ける構造としています。

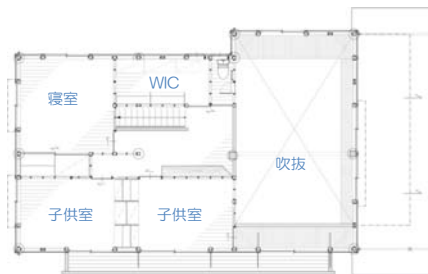
床、天井の仕上げを無垢板張り、内壁を珪藻土で仕上げ調質の出来る素材を選定しています。

冬の対策として、高气密高断熱とし、開口部を大きくして昼間は日射を取り込み夜はLow-E硝子に内障子で熱が逃げるのを防ぐように考えました。

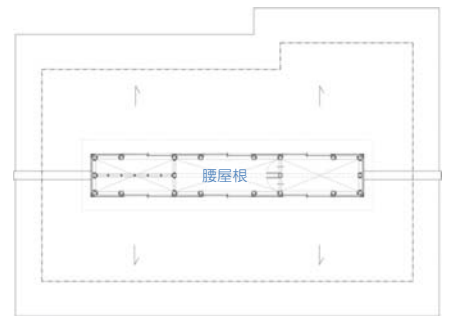
構造材は埼玉県産材の杉、桧を使用し、既存の解体時の材を床柱や小屋梁、式台や階段やカウンターに加工して使用しています。



1階平面図



2階平面図



小屋裏平面図



解体前の建物



昔ながらのデザインを取り込んだ南外観



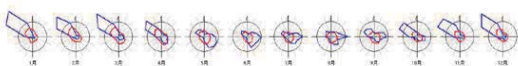
既存の門と調和した北側外観



夏は日射遮蔽と通風



解体した材を生かしたづくり



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

住宅部門

土間ハウス

アトリエ・クー 杉本真理子

徳島県徳島市

徳島県産の杉材は仮設工事用材として利用されてきたが、有効利用を喚起すべく造られた住宅である。特に外壁に空気層をとり、厚板を利用することで断熱効果を上げ、杉が持つ保温性と調湿効果が土間の活用と共に発揮された住宅である。

土間ハウス

【応募者名】勤務先名：アトリエ・クエ 勤務先住所：徳島県徳島市南佐古八番町5-21
 連絡先（勤務先） TEL：088-622-0288 FAX：088-622-8382

●地域への配慮事項

○徳島はこんな所！

徳島は温暖で過ごしやすい地域ですが、台風や強雨の多い地域です。また川の多い地域で、川風に建物は大きく影響を受けます。

山と川に恵まれた地域で、木材は檜と杉が多く、特に昭和40年代ごろまで、徳島杉は足場板として主に関西方面に供給され、関西で7割のシェアを占めてきました。しかし、次第に合板やスチール等に置き換えられ需要は大きく減少しました。一方、杉足場板は丸太材積の6割を占める中目材から生産されていました。杉の中目材の利用は、生産者（林家）にとって大きな課題となっています。杉足場と同様形状に近い幅広杉板は杉足場に変わる中目材の需要先として大いに期待されています。徳島県は杉足場の需要が少なくなったため山に残った、経が中目材以上の杉を多く持つ特徴ある木産地県といえます。

他県にはない杉足場の知恵と市場を活かし、杉板材を有効に使用する構法を地域へ発信し、様々な試みにて住宅等を建設することは、環境にも、経済にもとても大切なことだと考えます。

また、木をきざむ仕事が減り、大壁仕様の建物が多くなるなか、昔ながらの構法と、現代の流れをあわせもつ家づくりを試みることは、職人の育成や住まい手の選択肢を増やす意味でも、杉板を多く使う構法を試みることはとても有効です。そのため、私は、杉板を使う構法を試みながらも、細部の仕様には様々な現代の道具が調和する空間を目指し、枠の納まりや軒先の納まりなどに配慮をおこないました。

●作品の概要

徳島市内中心の眉山を借景する、のどかな敷地です。木造2階建、床面積105.47㎡(1F 61.27 2F 44.20)、外壁：焼き杉、屋根：ガルバリウム鋼板横葺き、内部床は土間と杉板2重張り、壁天井は杉板と和紙張り、建具は外部には木建とサッシと障子を使用し、内部には、施主支給の明治大正時代の建具や照明を多く使用しています。構法は杉板を柱間に落とし込み、その外周周りに更に杉板を重ね張り、更に柱際には際板を施しました。内部にはこの構造体である杉板が表しの箇所もあります。断熱は杉板の重ね張り、空気層にて施しています。

柱間に杉板を落とし込む構法は茶室みたいに部

材さえ確保しておけば、ユニットの様に再生の可能性もあります。また、この住宅は住まい手とともに成長しています。軒の深さは、風雨の強い徳島の気候にあった、勾配や深さになっていますが、その軒先の使い方や、その先の庭は、施主が楽しみながらより、趣のある空間となりました。

●作品の特徴

□断熱材を使わない断熱

(杉板だけで断熱性能を確保する試み)

杉の厚板を重ねること、空気層をもうけること、更に柱等の際には際板を設け、断熱を確保しました。住みだすと、断熱だけではなく、杉の保温性と調湿効果で少しの空調で、快適な住空間となりました。

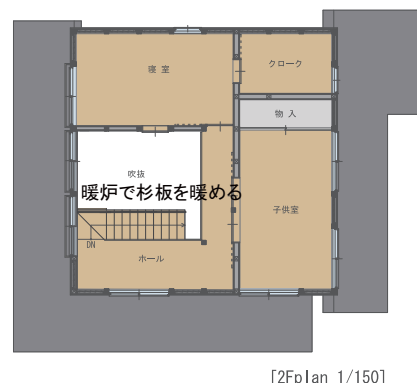
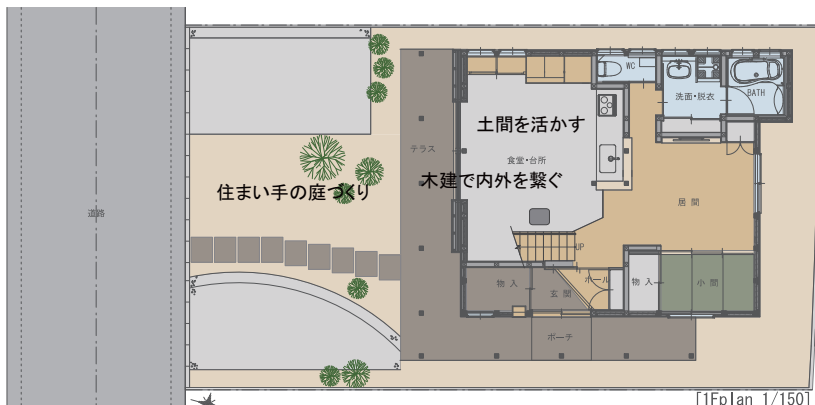
□杉板の落とし込み構法

柱間に杉板を落とし込み重ねて杉板を張ることで、断熱と防火性をあげています。内部にも構造である杉板を表していますが、各部材は従来の物より、繊細に細やかにディテールを詰めています。細く表す箇所と、太く力強く表す箇所、また、杉板の力強さと、和紙のバランスをとり、優しく軽やかな空間としました。



徳島杉板の活用

- ・断熱材としての杉板
杉板を重ねる
空気層を挟む
杉板の保温性活用
杉板の調湿性活用
- ・杉板を構造材として
柱間に使用
(落とし込み構法)
内部に杉板表し
- ・杉板の重厚さ優しさ
と和紙等のバランス
細部の納まり工夫で
モダンな空間演出



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

地域部門

復興住宅入居前後のコミュニティづくりのための、
「暮らしの懇談会」ワークショップ

宮城県本吉郡南三陸町 町長 佐藤仁

宮城県本吉郡南三陸町

大震災により町民は半減したが、50カ所に分散した仮設住宅に暮らす住民の生活一体感を維持増進するために、仮設や復興住宅の集会所建設は重要と考え、「暮らしの懇談会」を設け食事会など通じ住民意見を集約している。

復興住宅入居前後のコミュニティづくりのための、「くらしの懇談会」ワークショップ

〔応募者名〕 勤務先名：宮城県本吉郡南三陸町 町長 佐藤仁 勤務先住所：宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田 56-2
 連絡先（勤務先） TEL：0226（46）1379 FAX：0226（46）5348

●地域性への配慮事項

1. 目的

「くらしの懇談会」は、東日本大震災で地域コミュニティと住宅を失った住民が、仮設住宅での生活を経て、復興住宅に入居するにあたって、『これまでのつながりの継承、新しいコミュニティの形成の支援、円滑な入居対策等』を目的としています。

2. 背景

南三陸町の震災前のコミュニティは、集落ごとの集会所を拠点に様々な行事や会合が行われるなど、地域ごとにつちかわれてきました。約 18,000 人の町民に対して 50 か所以上の集会所があり、身近な活動拠点として、地域コミュニティの文化を担っていましたが、この震災で半数以上が滅失しました。

3. 配慮事項

特色ある地域の住文化を継承するためには、住宅の再建のみならず、地域コミュニティの再生が重要課題として認識され、集会所のプランや使い方の検討については、復興住宅の入居予定者や周辺住民の提案を反映できるように、以下の 3 点に配慮しました。

- ・震災前の地域コミュニティを継承する核施設としての位置づけを復興住宅入居者と周辺住民とで共有。
- ・入居予定者等の意見・提案を反映したプランの作成。
- ・使い方等を話し合う過程で、新しい生活の不安を少しでも取り除くとともに、コミュニティ形成を図る。

4. 住文化を継承するための配慮の視点

【震災前の集会所】 地域の運営にあたる自治組織（行政区や契約会等）の会議等を行う場所であると共に、集落全体が参加するイベント（祭りや行事）では、大鍋料理を作り振る舞われる場でもありました。また夏休みには子ども達が『朝読み会』するなど地域のつながりを具現する場所でした。

【仮設住宅の集会所】 住民同士がふらっと立ち寄り、おしゃべりしたり、「お茶っこ」したりするなど、日常のコミュニティの核としての役割を果たしています。

【復興住宅の集会所】 地域コミュニティ文化の象徴、地域の人と人をつなげる場として使われてきた集会所の役割を、復興住宅でも継承するため、いつまでも使い続けられる集会所を設計することが必要だと考え、入居者との意見交換を行う「くらしの懇談会」を開催しました。

●活動の概要

1. 「くらしの懇談会」の開催／復興状況の情報提供と意見交換

「くらしの懇談会」は、復興住宅ごとに開催し、入居予定者が顔合せして、まず伝統の家庭の味「たらすもづ」と「椿のお茶」による「お茶っこ」で気持ちをリラックスさせる雰囲気づくりに努めながら、意見交換を行いました。

「たらすもづ」は小麦粉と味噌と砂糖を水で溶いて焼いた昔ながらのおやつで、懐かしい



味を思い出させます。

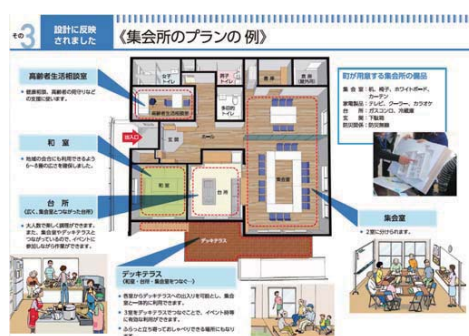
集会所の模型をみながら見ながら、気に入った場所を探したり、使い方を考えました。

また、事業の進捗やまちづくりの計画について、模型を使って分かりやすい説明を心がけ、新しい生活に向けて安心して頂く機会にもなりました。



2. 集会所のモデルプランの作成

集会所で大鍋料理を作るときに、台所が奥だと、作っている時や片づけている時に、お母さんたちが行事を楽しめない、という話が出て、台所を集会所の中心にしたプランが生まれました。こうして南三陸の昔ながらの地域コミュニティ文化を継承しながら、みんなで作る新しい集会所が生まれました。



3. 集会所の設計マニュアルを編集・発行

入居者等の提案を反映させた集会所の標準プラン及び検討プロセスをとりまとめた「コミュニティの拠点形成としての集会所等設計マニュアル」（平成 26 年 4 月）を編集し発行しました。

今後の復興住宅で整備する集会所の設計に反映させると共に、宮城県内の各自治体にも提供して、活用して頂けるようにしています。

コミュニティの拠点形成としての集会所等設計マニュアル



平成 26（2014）年 4 月 南三陸町

4. 仮設住宅の住民に発信

「くらしの懇談会」の取組みを、毎回情報誌にして、町役場のホームページに掲載するとともに、入居予定の方々に配布して、参加しただけでなかった方々とも共有するようにし



ています。

5. 復興住宅の見学や台所の体験

最初にできた復興住宅を皆で見学し、これからの住まいを実感しました。

また「くらしの懇談会」の「お茶っこ」は新しい集会所の台所を使い、昔の集会所を思い出しながら、これからの使い方、コミュニティづくりを考えました。



6. 入居後の管理運営、自治会づくり、コミュニティ形成支援

復興住宅に入居してからは、共同の庭や緑地を、ボランティアの応援を借りながら、皆で植樹したり、大鍋料理を作って、皆で食事をして、かつての集落での行事を思い出し、地域コミュニティの継承に向けて、動き始めました。



●活動の特徴

1. 復興住宅のハード面の整備だけでなく、集会所の使い方やプランの提案を活かし、具体化した

復興住宅の建設を急ぐ中で、地域コミュニティの継承と新たな形成に配慮して、住民参加の機会を設け、人材、財源、時間を生み出して取組みました。

2. 地域のくらしの特徴（地域性のある住文化）を継承する核として集会所に注目して取組んだ

復興住宅という共同住宅や共同の庭・広場といった形態が変わっても、集会所の使い方や地域コミュニティ活動を継承することで、地域固有のコミュニティ生活を継承することに取組みました。

3. 台所を中心とした集会所のプランを創出した

従来、イベントの核となる大鍋料理を調理できる台所を集会所の中央で前面に配置したことで、調理作業をする方々も行事に参加でき、皆で楽しめる集会所を創出しました。

地域コミュニティを継承すると共に、新たなコミュニティ活動の場を提案できました。



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

地域部門

「森とイエ」プロジェクト

Sa design office 一級建築士事務所 小倉寛征
(株)丸昭高橋工務店 高橋利久
(一財)下川町ふるさと開発振興公社クラスター推進部 相馬秀二
(株)照井康穂建築設計事務所 照井康穂
(有)エヌディースタジオ 中舘誠治
アトリエmomomo 櫻井百子
(有)山形建設 山形盛之
大野土建(株)大野真一郎
nest 新海直美
(一財)下川町ふるさと開発振興公社クラスター推進部 苅谷洋

北海道上川郡下川町

地元資源利用のすまい・まちづくりは産業の活性化と環境負荷低減に貢献することから、「森とイエ通信」を発行し地域材とともに暮らす家づくりを推進している生産システムを含めた住宅供給システムである。古出までにその理念を具体化した住宅5棟が相次いで竣工した。

「森とイエ」プロジェクト

〔応募者名〕 勤務先名：Sa design office 一級建築士事務所 勤務先住所：札幌市中央区大通西二十六丁目1-18 円山アーク 301号 連絡先 TEL：011-213-7636

●地域性への配慮事項

1：森とイエの「ねらい」

持続可能な地域の実現には「家づくり」が重要な役割であるとの認識を出発点とし、①安心して暮らし続けられる社会や経済への貢献、②下川町の森林資源を活かした家づくり、③愛着を持てる街並みづくり、④快適な暮らしと環境負荷低減の両立の4つを目指して活動する地域住宅づくり団体である。

2：プロジェクトの経緯

林業を主要産業とする下川町では、人口減少、高齢化、経済の縮小が続く中（図1）、住宅着工件数も14件（2011年）から7件（2013年）へと半減した。同時に旭川からのハウスメーカーの進出を受け、地元工務店の受注はわずか1件にまで減少した。町内での地元木材の使用量、職人の仕事量ともに激減した下川町の工務店は建築技術とコスト競争力の強化に向けた「下川ECOな家づくり研究会」を発足。2011年夏にアドバイザーである北方建築総合研究所の提案により札幌の建築家3名と下川の工務店4社、下川町ふるさと開発振興公社の8名でプロジェクトを設立した。現在は事務局、広報担当を加えた10名（図2）で活動中。

3：森とイエの「しくみ」

「家づくり」に興味のある施主は、サポートセンターに連絡。コンシェルジュが「森とイエ」の「しくみ」（図2）を説明し、最初に3つのコースから施主の要望にあった方法を選択する。次に作品見学や面談をもとに4名の建築家から設計者を指名、見積もり・実績に

より3社の工務店から施工者を自由に選択する。地域の森林資源の活用と厳しい自然環境（-30℃～+30℃にも及ぶ寒暖の差、9mを超える降雪量（図1））に対応するため、設計・施工の基準は①環境負荷の低減（Q値1.3、C値1.0）②地域資源の活用（地域材活用、薪ストーブの設置）③デザインコード（雪風への配慮と北国のライフスタイルの提案）の3つから成り立つ。

4：活動の展開

構造完成見学会、ワークショップなど住宅作品に触れていただく活動をおこなっている（写真8,9,10）。並行して融資、法律や制度、断熱や気密などの情報を提供する「建築家による家づくり講座」を定期的に開催している。また、HPの「オーナーズボイス」では施主の視点から新しい地域住宅づくりを理解していただけるよう取り組んでいる。季刊で「森とイエ通信」を発行して活動の普及に努めている。

今後は町外でも積極的に活動を行い、パートナーを幅広く募ることで、より開かれた活動へと展開したいと考えている。さらに、薪ストーブを快適かつ効率的に利用出来る設計手法の開発を進め、材料として地域材を使うだけでなく、地域材とともに暮らし続ける家の提案を目指している。

●作品の概要、●作品の特徴

2012年～14年に竣工した5作品を紹介する。全て「森とイエ」の理念と基準を満たした住宅作品である。

1：K-House（設計：小倉寛征、施工：丸沼高橋工務店）

敷地に残る防風林を手掛かりに地域の風景になじ

んだ住宅を目指した。水平性のある住宅を「コ」の字に配置して緩い囲み型を作り、市街地でも森の中で暮らすような環境を実現した。無落雪屋根としてカラマツ材を内外装に様々な形で使用し、デザイン展開の可能性に取り組んでいる（写真1,2,図3）。

2：S-House（設計：照井康徳、施工：山形建設）

2～3年後に供給される木質バイオマス地域暖房を見越し、床下温水暖房で基調室温をとり、主暖房の薪ストーブとのハイブリッド暖房とした。内壁は下川産粘土による土壁を、地域の人たちが参加するワークショップにて施工した（写真3,4,5）。

3：N-House（設計：小倉寛征、施工：山形建設）

下川町で農家を営むご夫婦が暮らす平屋住宅である。季節により生活様式の変化の大きい北国の新しい農家住宅を目指したコンパクトで高性能な住宅である（写真6,7）。

4：T-House（設計：小倉寛征、施工：丸沼高橋工務店）

普及イベントを通して「森とイエ」の主旨に賛同いただいた施主による天塩町での計画である。薪ストーブを主暖房とした下川町外で「森とイエ」初の住宅が2014年9月に竣工した（写真8）。

5：NK-House（設計：中館誠治、施工：山形建設）

高气密高断熱住宅において、薪ストーブで暖めた空気を住宅内部で適切に循環させることで、温度むらの無い快適な温熱環境を目指した住宅である。北方建築総合研究所の協力のもとで設計をすすめ、シミュレーション開発とマニュアル化を進めている（写真9,図5）。

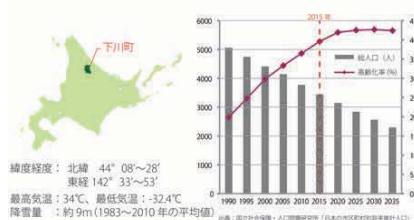


図1：下川町の位置と人口、高齢化率の推移（1990-2035）

Step1：3つのコースから自由に選択

建築家コース 建築家とのこだわりの家づくり 工務店を実績と信頼で選択	or	工務店コース 設計施工一貫の安心な家づくり 建築家のデザインアドバイス	or	モデルプラン 3モデルから最適な家づくり デザイン、性能、コストの検討
---	----	--	----	--

Step2：自由に選べる家づくりの仲間

相談は コンシェルジュへ 相馬秀二 17年ぶりの 建築家コンシェルジュ プロジェクトマネージャー	設計とデザインは 建築家へ 照井康徳 建築家設計事務所	工事と維持管理は 地域工務店へ 高橋利久 丸沼高橋工務店
事務局 功谷 洋 17年ぶりの 建築家コンシェルジュ プロジェクトマネージャー	中館誠治 エヌディーエス	山形盛之 山形建設
広報担当 新海直美 17年ぶりの 建築家コンシェルジュ プロジェクトマネージャー	小倉寛征 Sa design office	大野真一郎 丸沼高橋工務店

Step3：分かりやすい基準と3つのルール

①性能・仕様 北方型住宅ECO ・C値1.3以上の性能 ・C値1.0以上の性能 ・維持管理への配慮 ・断熱管理 (バイオマス)	+	②材料・素材 地域材活用基準 ・現地材 100% ・内装材 50% (目標) ・外装材 50% (目標) ・環境配慮木材の活用	+	③デザイン 森とイエデザインコード ・軒のある外観 ・薪ストーブの設置 ・無落雪屋根 ・推賞スペースへの配慮
---	---	---	---	--

図2：森とイエのしくみとメンバー、基準



図3：K-house 平面図



写真1：K-house 外観：無落雪フラットルーフとカラマツ外装材を採用



写真2：K-house 内観：床に下川産のナラ材、壁・天井の一部にカラマツ材を採用



写真3：S-house 外観：無落雪勾配屋根とカラマツ外装材を採用



写真4：S-house 内観：床にドロマツ、壁に下川の土を採用



写真5：S-house 下川の土による壁塗りワークショップ風景



写真6：N-house 外観：軒先に薪をストックできるデザイン



写真7：N-house 内観



写真8：T-house 構造見学会と上棟式の様子



写真9：NK-house 完成見学会にて施主自ら見学者に説明



図5：NK-house 北総研による温度分布シミュレーション



写真10：構造見学会と家づくり講座（断熱・気密）の様子

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

地域部門

住田町役場新庁舎

住田町長 多田欣一

岩手県住田町

住田町は山林が大半を占め木材及びその加工利用が主産業であり、それを象徴する大規模木造庁舎が建設された。大屋根に支えられた木質空間は明るく且つ親しみを持ちやすい空間となっており、訪れる町民を優しく迎えている。

住田町役場新庁舎

【応募者名】勤務先名：住田町 総務課 庁舎建設室 勤務先住所：岩手県気仙郡住田町世田米字川向 88-1
連絡先（勤務先） TEL：0192-46-2111 FAX：0192-46-2111

●地域性への配慮事項

住田町は岩手県の東南部、北上山系の南端に位置し、町の約90%を森林が占め、人口約6,000人の少子・高齢化が著しい山村の町である。豊富な森林資源と、製材、集成材加工、プレカット加工工場からなる木工団地、第3セクターの工務店などを中核として、環境に配慮したFSC森林認証による林業体系、木質バイオマスイエネの普及、森林環境教育の取組みなど、一貫した木材流通の構築、林業・木材産業のシステム化を進め「森林・林業日本一の町づくり」に取組んでいる。新庁舎はこの様な地理的状況と産業構造を背景に本町に相応しい木造庁舎として誕生した。

新庁舎は、行政活動の拠点であることはもちろん、住田町の人・モノ・情報の発信・交流の拠点である。

新庁舎で使用している集成材等の木材は、ほとんどが町内で生産、調達が可能であり、そのことが本町林業の「川上から川下まで」という一連の流れの集大成として、森林・林業日本一の町づくりのシンボルとしての位置付けを担っている。

本町新庁舎が、「大規模木造公共施設」のプロトタイプや、木質ペレットボイラーが再生可能エネルギーのモデル、使用している木製の備品・什器類は町産木材の製品として、木材利用推進の一端を担うことを期待している。

新庁舎は、住民協働で交流プラザ、授乳室、キッズコーナーなどブラン、アイデアを出し合い、使いやすい工夫を取入れ、建方では町産材で、町内の職人が建設に携わり、庁舎の設計・施工費の98%が町の財源で賄われている。まさに、町民の財産として誕生した。これから多くの公共施設への木造建築が広まるこ

とで木材産業が活性化することを期待したい。

●作品の概要

【規模・構造】

木造2階建て、耐力壁軸組工法・レンズ型木造トラス構造、耐震安全性の分類I類(1.5)

敷地面積 7,881㎡

建築面積 2,419㎡

延べ床面積 2,883㎡

木構造部数量 710.7㎡ 町内産約70%

【事業費】 約12億5千万円

【庁舎の機能】

町民ホール、執務室、交流プラザ、会議室・庁議室・応接室、電算室・印刷室等、木質ペレットボイラー、防災機能

●作品の特徴

庁舎は南北に長い(約90m)建物で、南側の大きな柱と大きな庇で町民やお客さんを優しく迎え入れる。「人にやさしく親しまれる庁舎」「環境にやさしく防災の要となる庁舎」「住田町らしさを発信する庁舎」をコンセプトに様々な工夫を取入れた庁舎である。

○ラチス耐力壁

耐力壁として耐震性の強化や自然採光による省エネを図るため、国内初のラチス耐力壁を採用。ラチス耐力壁はそのまま木を現し仕上げにすることができるため室内では開放的な視界が広がる。

○トラス梁

1つの梁が3本の集成材を組み合わせたものできており、大スパンが可能となり、吹抜け空間と執務室2階は柱のない室内を実現し、将来のレイアウト変化に対応できる計画になっている。

○木造での高い耐震性能

壁倍率15倍の高強度耐力壁と9倍のラチス耐力壁の組合せながら、木造本来の靱性を確保できるように揺れに追従する柱脚金物を使用した構造で耐震安全性の分類I類1.5を確保。

○耐火性能

準耐火構造として燃え代設計を採用し、初期消火としてスプリンクラーを採用。

○再生可能エネルギーの利用

庁舎で消費する冷暖房の約60%以上のエネルギーは、住田町の、製材副産物である木質ペレットボイラーで燃やし、エネルギー源としている。また、太陽光発電も採用している。

○町民のためのスペース

新庁舎建設により、町民や来庁者が利用しやすく、イベント、情報発信などに活用できるスペース(交流プラザ)、災害対応が迅速かつスムーズに行える工夫を取り入れたスペース(町民ホール)を確保した。

○建物の維持管理

大きな屋根の庇により壁面への直射日光、雨雪等を避け劣化防止、降雨・降雪時の歩行の安全を確保している。また、庁舎の周囲に通路を設け高所の維持補修が容易にできる。さらに、室内の設備を表わしにすることで、木構造の良さを視認できるとともに、設備の維持管理も容易にできるものとしている。

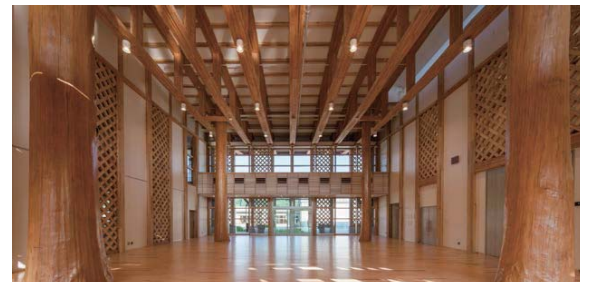
○その他、落雪対策として屋根にドレインヒーターや、サッシをアルミと木製の複合により断熱・結露防止の効果を高めている。また、外壁には町産スギを用いて町内の職人による鎧張り、内装にはスギ板張りを施し、気仙大工の匠の技を現している。



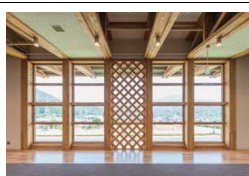
柱がない広い空間の2階フロア



木製のカウンターを配した1階フロア



4本の象徴木を配した交流プラザ



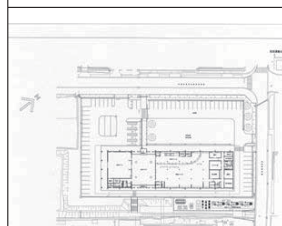
ラチス耐力壁とアルミ+木製窓枠



庁舎西側全景



木質ペレットボイラー



配置図・1階フロア



ラチス耐力壁



トラス梁

建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

地域部門

地域と共に生きるための持続可能なライフスタイルを
創造する取組み

一般社団法人 IORI 倶楽部

福島県大沼郡三島町

会津地域固有な木材資源と木造住宅を核に地域社会の活性化と住民と行政等の交流を促進する事業を展開している。福島地域に根ざしながら住宅建築が備える多様な価値を最大限発見し、広く地域に発信する活動である。

地域と共に生きるための持続可能なライフスタイルを創造する取組み

【応募者名】団体名：一般社団法人 I O R I 倶楽部 住所：福島県大沼郡三島町早戸字湯の平687
 連絡先：TEL：080-1668-9643 FAX：0241-42-7177

地域性への配慮事項

会津地域は国内でも有数の豪雪地帯であり、可住地域の殆どが中山間地域であるため、日々の暮らし、インフラの維持、産業の立地といった様々な面において、困難が伴う地域となっている。県内は元より国内でも有数の、過疎化・高齢化・少子化の進行した地域でもあり、生活基盤の存続に危機感が漂っている。

近年はグローバル化の観点から、国を挙げて産業基盤の再構築が図られており、林業や建設業においても、集約化・効率化を伴う新しい生産システムが、全国各地で稼働を始めているが、会津においては地勢的要因、気候的要因から、馴染まないものとなっている。

この地において求められているものは、豊かな自然環境、歴史に裏打ちされた伝統や文化を守りながら、質の高い暮らしを連続と未来へ繋いで行くための、価値観の共有と、持続足らしめるための新しい生活スタイルの提案である。

取組みの概要

会津地域が抱えている現代の社会構造に起因する根の深い課題に対して、解決の糸口となるような提案を行い、提案を具現化させるための「場」をつくる事で、関係者間のコミュニケーションを活性化させ、解決に向けての活動が有機的に広がって行く取組みをデザインし、実践している。

■現在までに取り組んできた「場」づくりには次のようなものがある。

- ◆会津材の特徴と地元大工の伝統的な技術を活かした、木造コンセプトハウスの設営および運営。
- ◆原発事故による被災者の長期避難生活を支えるための、杉板倉の木造仮設住宅建設とその後のサポート。
- ◆被災者と共に、長期避難生活の先にある、新しいライフスタイルをデザインするための取組み。
- ◆古民家をシェアオフィスとして再生し、中山間地域にベンチャー企業家の定住を促進する取組み。
- ◆避難者のニーズを鑑みた、移築可能な復興住宅のコンセプトを、週末農業向けの小屋を建設する過程において実験。
- ◆中山間地域の古民家を学びの場とし、アーティストとの連携で子供の五感を育む暮らしを提案。
- ◆今後、地域において急増する空き家の問題に対し、管理・活用等の相談体制を整備する取組みを開始。

取組みの特徴

- ◆課題の解決において、既存の枠組みの外から客観視する事によって、常識に囚われない柔軟な発想の解決策を生み出す努力をしている。
- 例えば、飛び腐れ等でリスクが高く、市場競争力が低い会津材の活用を考える場合、既存の流通に乗らない、長尺大断面材を標準的に扱える仕組みを構築する

事で、オリジナリティーを打ち出す事が出来るようになり、雪国ならではの骨太な民家を範とする、伝統的な住まいづくりの継承にも繋がる。

また、応急仮設住宅に対する過去の反省から、福島における仮設住宅の再構築を試み、従来の発想から脱却して「長期避難者の生活を支えるための(仮設ではない)住まいを、スピーディ且つ限られた予算の中で、如何にして質の高いものを提供できるか」というコンセプトに立脚してプロジェクトを遂行した結果、復興住宅への転用を可能とする木造建築が生まれた。

◆従来の枠組みとは一線を画す取組みを行うにあたり、ステークホルダー間のコンセンサス作りを丁寧に行う事にも留意している。

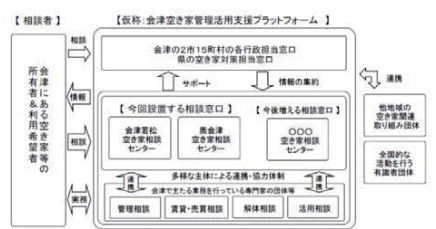
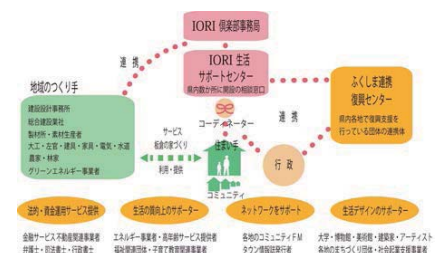
全てのプロジェクトにおいて、地域住民・行政・サービスや商品の利用者および提供者・連携する団体や個人の参画を促すと共に、相互のコミュニケーションを図る機会を考慮し、意見や提案を計画策定段階もしくは事業途中でも反映させ、より良いものに創り上げて行くための仕組みのデザインを行っている。

往々にして事業の計画立案から執行に至るまでに時間を要する事態になっているが、結果として納得のいく成果が生み出される事に繋がっている。

I O R I 倶楽部が行って来た取組み

青字は「場」づくりに関連する取組み

- 2010年 6月 任意団体「奥会津 I O R I 倶楽部」発足
- 7月 国土交通省「地域材活用木造住宅振興事業」木造コンセプトハウス「つるの I O R I」着工
- 2011年 3月 「つるの I O R I」竣工、運用開始、コミュニケーション紙「I O R I」発行開始（現在 vol.7）
- 2011年 4月 木造応急仮設住宅整備事業の公募に参画（コンセプト立案・資材調達・施工体制整備を担う）
- 2011年 10月 約半年間で、いわき・会津若松・金山・只見に206世帯の「杉板倉の木造応急仮設住宅」を建設
- 2012年 1月 「ふくしまの家」復興住宅供給システムプロポーザルに参加（モデルプラン作成団体に選定）復興に向けての新しいライフスタイル「I O R I 生活」を提案
- 2012年 2月 「地域内のバイオマス活用による被災者の救援と新規雇用創出事業」を県に提案
- 2012年 3月 緑の住宅普及支援事業「100年杉の雪上伐倒見学会」を開催
- 2012年 5月 福島県地域協働モデル支援事業「被災者のためのライフスタイルデザイン支援事業」を実施
- 2012年 9月 林業研究グループ等活動発表会（東北大会）にて成果発表
- 2013年 1月 アーティスト in レジデンス事業「精神の<北>へ」を国際交流基金と共催
- 2013年 3月 「交流による恒久的生活への移行支援体制構築事業」を県に提案
- 2013年 4月 空古民家の再生による体験交流施設整備事業「清匠庵」竣工
- 2013年 6月 再生古民家におけるIT企業とのサテライトオフィス実験事業開始
- 2013年 7月 「一般社団法人 I O R I 倶楽部」に改組 法人設立
- 2013年 9月 「復興に向けた木の暮らしシンポジウム」への参加、事例発表
- 2013年 10月 緑の住宅普及支援事業「100年杉の新月伐倒見学会」を開催
- 2014年 1月 都市農山村交流のための「奥会津大交流フェア」に参加（東京で開催）
- 2014年 2月 「地域型復興住宅による住まいの復興活動支援マニュアル」への記事掲載および調査事業を実施「週末農業向けの作業小屋新築に伴う移築可能性と避難者のニーズ把握に関する調査事業」
- 2014年 4月 福島芸術計画「森のはこ舟アートプロジェクト2014」に参画、計画立案および実施にて協力
- 2014年 8月 「古民家を学びの場とした子供の五感を育む暮らし」を提案
- 2014年 9月 「空民家活用による地域活性化の研修会」を、会津未来創造推進本部と共催
- 2014年 10月 「福島県会津地域における空き家管理・活用等の相談体制整備事業」を開始、事業遂行中



建築研究所すまいづくり表彰 地域住宅奨励賞

地域部門

コミュニティ・アーキテクトをめざして
ライフワーク「越前武生のまちづくり」

石本都市建築研究所 石本茂雄

福井県越前市

コミュニティ・アーキテクトによる活動である。地域に寄り添い多彩な空間創造、学習、まちの維持管理に活躍している。常に街と建築が作る空間環境に深く関心を寄せ、地域資源を最大限活用できる地場の専門技術者を目指している。

コミュニティ・アーキテクトをめざして ライフワーク「越前武生のまちづくり」

【応募者名】勤務先名：石本都市建築研究所 勤務先住所：福井県越前市四郎丸町 16-5-19
 連絡先（勤務先） TEL：0778-24-1387 FAX：00778-24-1387

●地域性への配慮事項

「首長の思いつき」「都会の気まぐれ」「コンパのおしつけ」により単発の打ち上げ花火を上げ、惨めに衰退していく町が数多くみられます。循環型社会の中でコンパクトに地域の文化や歴史・社会資産を活かした持続的なまちづくりが大切な時代です。町の最後の手段である「観光」に走るのではなく、「安全・安心」「働く場の確保」「教育・子育て」「アメニティ」「歴史・文化の謳歌」などをめざした、地味でも地に足のついたまちづくりを実践していくことが本来の姿だと思います。その手法の一つとして、町に「コミュニティ・アーキテクト」が育っていくことが重要だと考えます。

●作品の概要

地方文化都市でライフワークとしての「まちづくり」

1 環境保全、建築保全、再生、継承

- ・エコレッジの設計、運営、里地・里山の保全活動
- ・町屋、大規模農家、事務所ビル等のすまい改修
- ・街並み保全 「蓬萊蔵の町」のコーディネート、設計
「北陸道界限」「和紙の里」の景観指導、設計
- ・景観形成 市の景観委員を務め、風景の保全継承
- 2 地域活性化 市、商工者、JC、RC等の活動参加
- ・和紙の里での都市再生プロジェクト事業 ・TMO形成
菊人形、駅前広場、まちづくり懇話会等の検討
- 3 教育、人づくり
- ・福井大生の都市設計の授業と町中発表
- 4 広報 「蔵の町」に「武生町塾」を開設
町の紹介、町中散策の拠点整備
- 5 すまいづくり
- ・地場の材料、伝統を生かした住宅の設計、改修
市民向けの「住宅設計講座」「住まい安全マップ」

●作品の特徴

「コミュニティ・アーキテクト」とは次の時代の都市ビジョンが読め地域のネットワークを駆使して、建築空間をベースとして新しい価値を生み出すことができる人材である。

「日本一住みやすい町—武生」の中で地元に住み、こだわり、誇りを持って建築をとり巻く巾広い環境の中で30年来まちづくり活動に悪戦苦闘してきました。町にコミュニティ・アーキテクトが育ち、ライフワークとして息の長い持続した「まちづくり活動」を実践し、将来に橋渡しをしていくことが、地方都市の継続に重要な手法と考えています。単発のまちづくりにスポットライトをあてるだけでなく、このような人達に光をあて、バックアップしていくことこそ 大切な時だと思います。



里地・里山 100 選-坂口の環境保全



エコレッジ交流センター



福井大学生の町中発表



学生と市民のまちづくり交流



大規模農家の老建改修



蓬萊蔵の町



町屋改修-ちひろ生誕記念館



共同住宅に改修した
中心市街地の事務所ビル



伝統を生かした若者住宅



卍が辻のポケットパーク



北陸道界限の町屋改修



武生町塾-広報・散策



たす町の花嫁行列



卍が辻のポケットパーク



北陸道界限の町屋改修



武生町塾-広報・散策

